
人類最終で、危険察知で、命を大事に、な運転手

MUTOU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人類最終で、危険察知で、命を大事に、な運転手

【Nコード】

N4471S

【作者名】

MUTOU

【あらすじ】

交通事故で死んで、緋弾のエリアの武藤 剛気に憑依！もらった能力は人類最終、絶対的な危険察知、そして元の武藤の運転スキル。ちなみに命を大事にとは書いてありますがヘタレと言うわけではありません。ちなみにこの小説は武藤剛気ではなく完璧なオリキヤラと化してます注意！

序の話 憑依（前書き）

え、初心者の方のMUTOUです。

ちょっと無茶しつつも完結目指してがんばります。

序の話 憑依

死ぬ、と言う意味はわかるだろうか。

ある人は魂の清算と言う。

また、ある人は天国と地獄の分岐点と言う。

またまた、ある人は新たな人生の始まりと言う。

どれも正しく、もしくは間違っているかもしれない。

もしくは全部一緒なのかもしれない。

だが、俺はそれらとは違う考えを持っている。

いや、持っていた、が正しい言い方だろう。

俺は死はすべての終わりだと思っていた。

後に残るは『無』だと思っていた。

いや、たとえ、輪廻転生していたとしても覚えてなくては『無』と一緒にじゃないか。

だが今日、（いや、ありとあらゆる時間軸に存在していないらしいが）俺は死の後を経験した。

「オメデトウ、君は運命に逆らった。」

それが、俺がなにやら彼岸花が咲き誇る花畑で起きたとき言われた最初の言葉だった。

「運命？何の事を言っているんだ？そしてどこから話しかけてるんだ？」

俺は辺りを見回す。誰もいない。あるとするならば地平線まで続く彼岸花だけだ。

「……ここはどこだ？断言していい。俺はこんな場所は知らない。こんなあたり一面を埋める彼岸花がある場所は絶対に知らない。」

そんな疑問を描いていた俺にまた、声かけられる。

「うむ、そのすべての質問に答えて進ぜよう。運命とはだ、お前が生まれる前から決まっていたさだめのことだ。」

「……あの予定説ってヤツか」

「まあ、少し違うが、些細な違いだ。それでいい。それで次じゃ、どこからと言われてもここから、としか言い様がないのじゃが。」

「ならばその具体的な場所を教えてください。」

「じゃから、ここから、と言う意味はこの、彼岸畑の事を指しているんじゃない。」

「は？畑が話しかけている？冗談きついで。」

「……そう言うことが、ならばよし少し待っておれ。」

ぎゅうじゅうじゅうじゅう、ぽん！

「そいつ！どうじゃ？これならわかりやすいじゃろう？」

……虚空からじいさんが現れた。

「どうした？何を呆けておる？貴様が人型に話しかけると言う様式美にこだわるからこのような形をしてみたのじゃが。」

「……お前は、誰だ？いや、もしくは、何だ？」

「ふむ、なかなか理解が早いのか？こちらとしては都合が良い。強いて言うなら、わしは『神』じゃ。そしてここはお前らの言う黄泉じゃ」

「『神』だと？そんなことがあるわけないだろう。ならば何故、神たる由縁の『救い』などが存在しなかった？あの、世界の裏側で苦しんでいた子供や大人たちはどうしてあのままなんだ！？」

「……わしの事を指すならば『雲の上の傍観者』^{クンヤロウ}とでも言い換えれば良いんじゃないか？わしは別にお前たちに恵みを与えるために

生まれただけでも、蔑まれるために生まれたわけでもない。わしの仕事はただ一つ。運命を監視することじゃ。」

「ならば、救いはないと言うのか！」

「それはわからん。もしかしたらお前たちの言う救いを与える神もいるかもしれない。火のないところに煙は立たず。ならばお前らの言う神もいておかしくはない。ただ、わしではない事は確かじゃ。」

「・・・運命をつかさどるなら救いを与えられたんじゃないか？」

「ちゃんと聞いておったか？わしは、運命を『監視』するだけじゃ。運命は勝手に決まる。わしはただそこから外れたお前みたいな存在を世話するだけじゃ。」

「その、運命から外れた、と言うのはどういうことだ？」

「ああ、そうじゃ。あまりにも本題からかけ離れすぎたな。詳しく言うのだ。お前は死んだ。正面衝突の交通事故だ。本来だったらお前は車の前面部がつぶれた所為でスプラッタな死因はずなんじやが、お前は事故のとき、窓ガラスを割り、相手の車のボンネットに頭をぶつけ、脳出血で死んだ。そこがお前が運命から外れた部分じや。」

「・・・別に変わってないじゃないか。結果的に死んだ。それで良いんじゃないか？」

「まあ、一応わしも仕事でな。その些細なところでも注意しなくてはいけないんじゃない。」

「そうなのか。なら、俺はどうなるんだ？」

そこで『神』はしばし考える。

「そうじゃな、外れたお前さんは調節をしなくてはいけないし、久しぶりの逸材じゃからのお。そうじゃ、お前、わしと契約しないか？」

「俺は、少女じゃないぞ、魔法少女的な意味で」

「・・・そう言う事を言いたかったんじゃない。ただ、わしは調整するのが面倒くさい。お前はまだ生きることができる。そういう契約だ。」

「死んだ人間が生き返るのはやばくないか？」

「ああ、そのことか。安心しろ、別の世界になる。」

「そうか・・・。」

「スマンな。そこまでわしは万能じゃないんだ。」

「いや、こちらこそすまない。悪かった。」

神と謝り合っつて・・・なかなか面白いものだな。

「そこでだ、侘びとして、三つ願いをかなえてやろつ。」

「三つか、悩むな。」

「ならばしばらく待とう。」

20分経過

「決まったぞ。」

「ならば申すが良い。」

「まず一つ。人類最終、想影 真心の能力が欲しい。」

「良いだろう。なかなか良いのを選んだみたいだな。万能などとはすごいな。」

「俺もあの話を読んでいて最強と思った。それ第二だ。『S 警視庁警備部警護課第 係』の井上 薫の能力が欲しい。もちろん常に最大出力で。」

「・・・それやったら精神崩壊どころか、脳が破裂するぞ?」

「そのための人類最終だ。」

「なるほど、だがいくら人類最終だからといってそこまで安全かは知らんぞ?」

「ならば二つ目は願いをもう二つ増やすことに使おう。」

「む、そこをついてくるのか。いや、だが、二つで良いのか？もっと増やせばできる事が増えるぞ？」

「もうすでに人類最終があるから十分だ。そして最後の二つは精神を余裕を持って崩壊しない程度に強化して欲しい。もう一つは、俺の家族にいくらか便宜を図ってくれ、これからの暮らしに困らない程度に。」

「・・・あい、わかった。もう良いのか？」

「ああ、送ってくれ。」

俺は神と向き合う。

そして神は手をかざし、

「ならば送ってやろう。お前の第二の人生に幸あれ、とな。」

「ああ、さよならだ。もしできたらまた会おう。」

そして俺の身体は透けてゆく。

そして透けきつた後、

「……………しまった、送った世界の詳細言っの忘れてた。」

「おお！見る、目が開いたぞ！」

「ええ、本当ね！」

「おし、ここが一番大事なところだ！お前の名前は、

武藤、剛気だ！」

序の話 憑依（後書き）

ちなみにそうそうアンケート見たくて悪いんですけど、ヒロインにするとしたら誰を選びますか？

1・中空知

2・平賀

3・風魔

4・峰

5・まさかの綴先生

6・大穴過ぎて自分でも何書いてんの？と言いたくなった、蘭豹先生

もし答えてくださったら嬉しいです。

一の話 覚醒（前書き）

同日中に第一話書き上げて見ました。

一の話 覚醒

おはよう、こんにちは、こんばんは。

武藤剛気です。

ええ、そうです。武藤剛気です。

あのどんな乗り物でも乗りこなす武藤剛気です。

なぜかその武藤剛気に憑依してました。

・・・もしかして武藤の乗り物のスキルって運転に関してのみ人類最終だったりして。

まあそれは良いとしよう。

性格は中身俺だから同じにはならないだろう。

ちなみに嬉しい特典があった。ストーリーの知識はないが、登場人物の知識を神はくれた。

ついでに戯言シリーズの技術的なものの知識もついでに。（殺人衝動とか殺し名特有の技術はないが、技術的なもの、たとえば、曲絃系とかをくれたと言う事）

ちなみに俺の今の状態はオムツをはき、上半身裸で毛布をかぶり、ゆりかごの中で寝転がっている。

キングクリームゾン！（3年ぐらい）

どうも、あの羞恥心どころか人権的な意味もふくめてやばかった時期を乗り越えた男、剛気です。

あのオムツ地獄から逃れるために必死こいてトイレの習慣をつけた後、離乳食の咀嚼に難儀し、今は普通にトイレにいき、食べ物を食べられる様になりました。

ああ、自分でできるってすばらしい！

さて、そんなこんなで幼稚園。このご時勢、不足している幼稚園にぎりぎり入れたそうです。

両親が抱き合って喜んでました。

通園バスに乗り、幼稚園に着き、クラスに分かれる。（ちなみに俺

はゆり組らしい)

ひらがなを眠気で震える手を精神力で抑え書き続け、眠気と戦いながら算数を解く。

これは、拷問か何かか？

もはや授業中寝るのを防ぐために精神力すべて持っていられるような気がする。

そして、休み時間。

俺は砂場で一人、泥団子を作っていた。

知っていたか？

泥団子を極めれば小さな地球儀だって作れるんだぜ？

俺は至高の泥団子を目指し、丸め、磨こうとしていたところに、視線を感じた。

正直言っただのシンクロや、フォトグラフィックメモリーを舐めていた。

最大出力になったシンクロはハムスター並みの小動物の視線を感知し、記憶のほうはどんな過去の景色でも思い出せなかったことはない。

さて、そのシンク口だが、今俺に向かっての視線を感知している。それも流し目じゃない。しっかりと俺のほうを見ている。

ためしに立ち上がって2メートルぐらい移動してみる。

視線はついてきた。

また試しに、逆側へ歩いてみる。

また視線はついてきた。

俺は視線の感じるほうへ目を向けて見ると、ちょこんと座っている女の子がいた。

少し手招きして見る。

それに気付いたのか、ととととあるいてくる。

どべっ

転んだ。

目元をぬぐい、またとととと歩いてくる。

あと4メートルぐらいのところでもたまたまた転んだ。

立ち上がり、涙目でこちらに歩いてくる。

さすがにこれ以上転ぶのを見るのは忍びないので迎えにいよいよつた

歩き出す。

「オレのなまえはむとう じゅうき、きみは？」

と話しかけると、彼女はおどおどと

「え、えと、えとえと、わ、わた、わたしのな、なまえはな、なか
そらち みさき、です。」

・・・

「う、うそだっ！」

「ひえっっ！」

あ、やば

「いや、じ、じめん。ついしりあいのなまえににたてて・・・」

「あう、だ、だいじょうぶです」

中空知 美咲。

あの凄腕オペレーターか。

転び癖は生来のものだったと、

「そういえば、オレのほうみてたけどなにかおもしろいものあった
？」

「えっと、すなばでひとりなになっているのかなって。」

一人ぼつちで砂場にいたのが原因か。

「どろだんごをつくってた。」

「?でも、つくるのはじかん、たくさんかかってたけど・・・」

「ああ、それはね、どろだんごをみがいてたんだ。」

「みがいてた?」

俺は首をかしげた彼女に乾いてベージュ色になりかけている泥団子を見せた。

「これはどろだんご?」

「そう、かわいてくるところなるんだ。」

「すごい!わ、わたしにもおしえて!」

「いいよ。」

そうして二人で泥団子を作り始めた。

月日は流れ、卒園の日。

コラそこ、手抜きと言わない。ただ単に作者の脳が幼稚園の頃の黒歴史思い出して鬱になって幼稚園児時代飛ばそうとなったただけだから。

「またね、美咲。」

「えぐっ、うん、ま、またね。剛気君。」

泣きながら帰っていく美咲。

当時作った泥団子は今もまだ教室に飾ってある。

教師によるとなかなか出来がよかったらしい。

そして俺も少し涙目である。

眠気で。

「おーい剛気〜。おいでくぞ〜。」

「ぬーま、まっつてよ、おとつせん。」

いまさらだが、俺の精神年齢は身体に引っ張られつつあることが発覚。

少し落ち込んだ。

さて、武偵高で会うのは必然だとして、その前に会えるかな？

（主人公は知らない、そう言う台詞に限って、再会フラグが立ちやすい事に。）

一の話 覚醒（後書き）

第一話終わりました。

そして、中空知りました。

一応、友人か、フラグかの中心にとどめたつもりですけど・・・
やりすぎたかも？

二の話 小学時代（前書き）

第二話です。

原作には後もうちよっと時間がかかりそうです。

訂正、キンジの行っていた中学は神奈川だったのでそれに変更。

二の話 小学時代

ぶえのす・たるです、武藤剛気です。

皆さん、経験した事ありませんか？

初めての始業式、壮年の男の校長の話聞き流しているとき、無性に眠くなる事を。

私がありますよ、と言つか私が初めてではないでしょうか、

始業式で眠気で倒れるのは。

いやあ、ガチで寝たね。はっと目がさめたら保健室。

保険医に、「大丈夫？」と聞かれたときなんて

「はい、大丈夫です。ただ、眠ってただけですから。」

なんてほざきそうになった俺の口を止められたのは奇跡だと思う。

その後、すこし眩暈とかしないか？程度の質問をされ、教室に行くよう促された。

俺は一年二組らしい。

一年二組の教室を探し、歩きまわる。

難なく発見する事が出来た。

まあ、順番に並んでたら難もくそもないけどな。

がらっ

教室のドアを開く。

「すみません、遅れましたあ。」

一応謝っておこう。

「おお、身体はもう大丈夫かい？」

「ハイ、大丈夫です。」

教室の様子から見るに、自己紹介タイムのようだ。

ふむ、今紹介されている女の子がもう、いやそれはもうすぐく目を
見開いてこっちを見つめているので、どうしたの？って聞こうと思
ったら、

「・・・・・・・・く・・・」

と何かつぶやいた。

・・・あの転ぶことに関してもう、達人のレベルの美味が何故あんなスピードが出せるんだっ!?

(主人公に付き合わされ走り回った所為で打たれ強さ、脚力、そして運動神経が少し上がったのが理由。ただ、転び癖は改善されてない。)

「あつ、ご、ごめん剛くん!だ、大丈夫?」

わたわたと離れる美味。

「し、死ぬかと思った。」

「う、ごめんなさい。」

しょぼんと沈んでしまった。

・・・被害者は俺のはずなのに罪悪感が沸く。

「いや、良しさ。久しぶり、美味。」

と、言っても数ヶ月だけだが。

「う、うん!久しぶり!」

と、言い会い、教室に戻る。

そして席がわからないから先生に聞こうと思ったら、そこには唾然を通り越して石化した先生がいた。

しばらくその後、石化した先生を元にもどすのに苦労し、そして直った後、自己紹介をし、席に座った。

それからというものをダイジェストでお送りいたします。

一年生。

「おーい、ドツヂやるっぜ！ドツヂー！」

「いいぜ、何賭ける？え？昼の牛乳？いいぜ、やるっぜ！」

「ほらほら、お前らもやるぞっ！」

「よーい、はじめー！」

「うおおおおおおおー！」

「イエアアアアア！」

「何でだ、何で当たらない！」

「嘘だ、あいつは背中に目でもある言っのかー！」

「たった一人に、全滅だと・・・？」

「武藤家の剛気は化け物カッ！」

ドツチ・・・シンクロの所為で弾道までもわかったちゃうのでマトリックスで避けて見せた。

二年生。

「缶蹴りやるぞ〜!」

「他のクラスのヤツも誘おうぜ〜!」

「よし、鬼決めるぞ〜。じゃんけん、ぽん!」

「武藤鬼な〜!」

「・・・貴様、見ているな!」

「何っ!」

「そこだああああ!」

「みつかった!?!」

「もらったあああああああ!」

「甘いぜえええええええええ!」

「ふ、他愛のない。」

「え、えと、じゅめんなさい!」

かんっ！ころころ・・・。

「なんですとおおおおおお！」

缶蹴り・・・全員片付けたと思ったら美咲に気付かず、敗北。（シンクローはなぜか美咲に反応しなかった。）

三年生

「メチャ当てやろっかー。」（メチャ当て・・・コート無しドツチみたいなもの）

「よし、何人くらい誘う？」

「20人ぐらいいたら十分じゃね？」

「わかった！えくと、武藤でしょ、中空知でしょ、山田でしょ、伊藤でしょ、不知火でしょ・・・」

「よし、いくぞー！」

「武藤、その首もらったあアアアア！」

「ふっ、残像だ。」

「なにっ！」

「くそっ！相手は一人だ、囲め、囲めえ！」

「無駄だあ！」

「何故だ！何故当たらん！軌道を予知でもしていると言っのか！」

「・・・もう、ムリだ。伊藤、後は頼む・・・。」

「山田！ヤマダあああああああ！」

「うるせえ！」「べしいっ！」

「うわあ、あそこで当てるとか鬼畜過ぎる。」

「外道なんですわかります。」

「またか、また、敗北すると言っのか！」

「フハハハハハハハハハ！われこそが勝者だああアア！」

「えっ？あ、ハイっ！ごめんなさい！」

ぽふっ

「ばあかあなああああああああ！」

メチャ当て・・・避けまくって弱ったところを殲滅。と思いきやまたもや忍び寄った美咲にやられる。

五年生。

スポチャン・・・美咲が変な剣見つけて暴走、教師含めて全員全滅
(俺含める)

・・・俺って意外に弱いかも・・・？

そうそう、超省略した気もしなくも無いが、小6になりました。

そして、友達が増えました。

「？床に手なんかついてどうしたんだい？」

「少し過去を振り返っていたただけだよ、亮。」

理解しました？原作キャラの一人ですよ？

下の名前に亮って言ったら一人しかいないでしょう。

そう、あの不知火亮が なかま になった！

とまあ、おふざけはおいといて。

「・・・もう、小6かあ。」

「そうだね、ねえ、美咲ちゃん。将来何するか決まってる？」

「・・・ニュースキャスターやって見たいなあ。」

「え？むりっしょ。お前噛むじゃん。」

「むぐ、ひどいよ剛くん！ちゃんと練習してるんだから！」

「そう言う剛気君はどうするんだい？」

「武偵かな、一番やって見たいのは。」

原作的な意味で。

「へえ、僕と同じだね。」

「なにっ？マジか。」

知ってたけど。

「私だけ仲間外れ？」

「いやいや、人の将来に仲間はずれも何も無いだろう。」

「むぐ。やっぱり私も武偵になる！」

「そっちのほうがムリじゃね？」

「いや、それでも無いよ。通信科とか直接的な捜査じゃなく、裏方の捜査を担当するところもあるみたいだし」

「そうなの？」

「うん。僕はそう聞いたよ。」

「じゃあ、私もそこ行って、それでまた一緒にいられるね！」

「そうだな、ま、一緒に一番か。」

「そうだね、そのほうが面白いし。」

そうして日々は過ぎて、舞台は神奈川武偵高等学校へ……

二の話 小学時代（後書き）

ただ単に不知火幼馴染フラグを立てて回収したかっただけです。

次から、峰理子、遠山キンジ、星伽白雪出します。

あれっ？白雪って中学同じだっけ？

設定の話 主人公紹介（前書き）

ただ単に主人公の設定です。

能力欄、武器はほぼWIKIPEDIA引用です。

訂正、さらに武器を追加。

設定の話 主人公紹介

主人公 武藤 剛氣（転生前の名前は不明、と言つか考えてない。）

神に運命に逆らった褒美？として武藤剛氣に憑依させられた主人公別に本編に出てこない設定だが、生前はどこぞの一流大学の生徒だった。性格的には武藤のテンションを割る二した程度。目下の悩みは肉体に引っ張られてく精神年齢。

能力

人類最終の『万能』

1 回見た技ならば全て使うことが可能。少し強化されて、直に見なくてもテレビとかでもコピーできる。最近の使い道は料理番組の料理を覚える事。戯言シリーズの血統的な能力以外のものは持っている。

S 警視庁警備部警護課第 係の井 薫の『シンクロ』、『フトオトグラフィックメモリー』

『シンクロ』

原因は神経成長因子（NGF）というタンパク質の血中濃度の異常な増加であり、高過ぎる脳内の活性に伴った感覚神経の過剰反応により、音や空気などに同調して、その場の異物や違和感を察知する事が出来る。特に緊張下では、アドレナリンやドーパミンなどにより一層NGFが促進される為、その能力が高まる。ちなみに脳へさまざまな負荷がかかるが、神の精神強化と、人類最終の能力・・・

というか強化された身体で抑えている。なぜかギャグパートの中空知美咲には通用しない。

『フォトグラフィック・メモリー』

写真を撮るように一瞬で物事を映像として記憶できる能力。ぶつちやけ某禁書目録の完全記憶能力。

『予知、妄想』

上記の能力が合わさったの副産物。神に願ったわけではないが、これも強化され、2キロ離れた狙撃の弾道まで正確に把握できるようになっている。

武器

愛銃 AMTハードボラー 二丁

AMT ハードボラー (AMT Hardballer) は、アルカディア・マシン・アンド・ツール (AMT) 社が製造するガバメントモデルの .45ACPセルフローディングピストルである。ハードボラーは、ガバメントモデル初の全ステンレス製であり、その他の特徴として、照門が調節できること、ガバメントモデルの特徴であるグリップ・セイフティーが伸びた形状になったことである。我らが主人公はこの銃をロングスライド、サブレッサー着脱可、フルオート、セミオート切り替え可にカスタムしてある。使用弾丸は .450マグナムエクスプレス弾。装弾数は7+1(ロングマガジン使用時は18+1) ホルスターは腰の両端。

ナイフ 二丁

バイオ4のクラウザーの持っていたナイフ。

スローイングナイフ20〜30本

投擲用のナイフ。幅1.5センチ、長さ柄と合計で13センチ程度。柄にツイストナノケブラーがつけてある。

コルト ピースメーカー 一丁

コルト・シングルアクション・アーミー（英語：Colt Single Action Army）とは、西部開拓時代に使用されていた回転式拳銃。生産は現在でも継続されている。通称は「ピースメーカー」。1892年から20年ほどアメリカ陸軍に制式採用されており、この際の制式名はM1873。主人公はこれを暗器術で袖に隠し持っている。使用弾は.45LC弾。ロングコルト たまにハードボラーの弾をこめることも。

レイジ・オブ・ザ・イーグル 一丁（これは平賀文に会うまで出ません）

作者オリジナル銃。

コルト ピースメーカーのカスタム銃。でももはや面影は無い。剛気が銃のカスタムしているときにやってみたくなくて作った。銃身12センチ、銃口は11.5ミリ直径。銃身の先に熱放出用の穴が8つ開いている。ピースメーカーを完全にバラし、シリンダーの穴を広くしたやつに取り替え、撃ったときに銃身が破裂しないため熱放出路を作成。バレルも新調して、すべての部品を強化した部品に

取り替えた。面影があるとすればハンマーや、グリップの部分のみ作ってみて、剛気はこういった、「これならトールラス社のレイジングブル454を買えばよかった。」使用弾は・454カスール弾。

以下は他の魔改造原作キャラの紹介。

中空知美咲

剛気の幼稚園からの幼馴染。

最初の頃はべつたりと言言葉がびつたりと言わんばかりに一緒にいた。

極度の顔見知りは改善。

運動神経は剛気の後を追って走り込みなどを年齢としては異常なほどやっていたため、(武藤も必死についてくる彼女をみて調子に乗ったと言つのもある)自動販売機をひしゃげさせるぐらいの脚力はある。(剛気がやると横に両断する)

情報科のSランク相当の技術を取得。

通信科のAランク。

特技は音遣いとハッキング。

ペンタゴンに足を残さず5分で進入する。

使用武器は

FN Five-seven

FN Five-seven (FN ファイブセブン)は、ベルギ

ーのFN社が開発した自動拳銃。P90用サイドアーム(補助兵器)

として開発された。名称は5.7mm弾を使用することに由来し、

「Five-seven」と表記されるのは、FN社の名前に由来する。

一般的なモデルではダブルアクションオンリーとなっているが、タクティカルモデルとアメリカ国内モデルのFive-seven

USGではシングルアクションになっている。

使用弾は『5.7mm×28弾 SS190』

この弾薬は小銃用の弾薬をそのまま短くしたような形状で、高い初速で発射されるため貫通力が高く、100mほどの距離があってもボディアーマー（NIJ規格レベルIIIA以下のもの）を貫通するとされる。

バタフライナイフ

キンジのとは違い、両刃の5センチ幅のナイフ。

購買で剛氣に買ってもらった一品（と、なっているが実は剛氣が改造を施した一品で刃はチタニウム合金を使った超硬質性なもの。緋色金よりは劣るが十分硬い）

以上、中空知美咲の紹介。

不知火亮

小学校から武藤グループに参入。

美咲ともども鍛えられている。

剛氣がテレビを見てパクった中国拳法、『八極拳』を叩きこまれる。そのお陰で体術は目を見張るほどのもの。

ついでに曲絃系も使える。

その所為でついた二つ名が『鬼蜘蛛』。

曲絃系を蜘蛛の巣状に張って、その上を走り回るかららしい。

強襲科Aランク。

使用武器

H&K MARK 23

H&K MARK 23 は、ドイツの銃器メーカーヘッ

ケラー&コッホ社（Heckler &amp; Koc

h GmbH, H&Kとも）が1991年に開発した自

動拳銃である。日本では「SOCOM」または「SOCOM PI

STOL」として広く知られているが、アメリカ合衆国の正式名称はMk.23 MOD0であり、欧米などではSOCOMの名称が通じない場合が多い。

使用弾は『.45ACP弾』⁵

曲絃糸

言わずと知れた、糸での攻撃方法。

亮はビルの鉄骨ならばまとめて8本ぐらい切断可能。

範囲は3キロ。

と言っても、3キロまで行くと、感知とかの器用な作業は出来ない。

アサルトナイフ

武藤が作った一品。強化プラスチックの柄に、チタニウム合金の刃。折りたたみ不可。いつもは脇のホルスターに入れてある。

以上、不知火亮の紹介。

遠山キンジ

武藤グループに中学校から参入。

とある女子グループにはめられて、剛気と戦闘。そして敗北。

保健室で駄弁っていたら意気投合。

キンジはグループに入るのが遅かったため、そこまで強化されているわけではないが、原作の三倍は強くなっている。

剛気からはったりや、詐欺などの演技力を鍛えられている。

使用武器

ベレッタM92F キンジモデル

ウルサーP38の流れを汲むプロップアップ式ショートリコイル機構を持ち、ダブルカラムマガジン複列弾倉に15発の9mmパラベラム弾を装填する。

同社の拳銃の特徴である遊底スライドの上面を大きく切り取ったデザインは、イタリアの銃器デザインのひとつの到達点とも呼ばれ、見た目の美しさから映画やTVドラマ、アニメなどでも主人公などの使う拳銃として、よく登場する。 作動方式には前作のベレッタM1951で採用したワルサーP38を参考にしたプロップアップ式ショートリコイル機構を採用しているが、これはこの特徴的なスライド形状により他の方式を取れなかったという面もある。しかしこのスライドは、上部を切り取ったことにより軽量になり、スライド後退時の衝撃を和らげ、排莢口の拡大によりジャム（弾詰まり）を防ぐ効果もある。この形状により耐久性があまり無さそうに見えるが、適切な熱処理を施すことで十分な強度を持たせることが出来る。また、使用弾薬が9mmパラベラム弾のため比較的反動が小さく、アンビ・セーフティや左右差し換え可能なマガジン・キャッチなどの利き手を問わない装備によって、開発当時としては格段に扱いやすい銃であった。キンジはこれを三点バースト、フルオート機構をつけたカスタム銃を使っている。違法改造である。

サムライエッジ

対理子戦後から参戦。

バイオハザードから引用。

ラクーン市警特殊部隊S・T・A・R・Sの隊員に支給されているカスタムアップされた拳銃。ベースモデルはベレッタM92F。製作はサンフランシスコ郊外でカスタムガンショップ「KENDO」を営んでいるジョウ・ケンドが手がけている。長期間にわたる厳しいトリアルテストをクリアして、S・T・A・R・Sに正式に採用されるにいったった。

ラクーン市警はS・T・A・R・S制式拳銃を製作するにあたり、製作サイドに次の条件を提示した。

使用弾薬：警察機関で一般的な、9mmパラベラム（9x19mm）を使用すること。なお弾薬の携行や調達を考慮し、SM^{マガジン}Gと共通の強装弾が使用可能な耐久性を有すること。
装弾数：弾倉内に13発以上装弾可能なこと。
サイト：耐久性を考慮した固定タイプで、近距離戦闘における素早いサイトイングが可能な様に、3ドットタイプとすること。
命中精度：25ヤード（23m）で2インチ（5cm）以下であること。尚、3,000発撃つた後も同等の命中精度を有していること。

フアンクション：様々なシチュエーションからの射撃を考慮し、トリガーアクションはダブルアクションとする。また左右どちらからでも操作可能なように、アンビタイプセイフティとする。
重量：長期間の作戦行動での携行を考慮して、弾薬を除く本体重量は35オンス（1,000グラム）以下とすること。

これらの性能は市販パーツの組み合わせではクリアすることができず、結果的に1挺ずつ構成される全てのパーツ同士の折り合いをつけながら、作業を進めていかななくてはならない。スライドは通常のものではなく、強装弾の使用にたえるためスライドロック部を幅広にした「ブリガーディアスタイル」を採用している。日本刀の刃を連想させるこれはサムライエッジの由来にもなっている。またグリップはラバーグリップと木製グリップを複合させた「ハイブリット・カスタム・グリップ」を装着。これにより保持性能が上昇している。グリップ中央には「S・T・A・R・Sゴールドメダリオン」が入る。

キンジの言うならばアルバート・ウエスカーモデルにフルオートと、三点バーストをつけたカスタムモデルである。

武藤曰く、「遠山キンジモデル」。
ちなみにメダリオンはついてない。

バタフライナイフ

原作どおり金一から託された、緋緋色金を使って作られたナイフ。とてつもなく頑丈である。

以上、遠山キンジの紹介。

平賀文

まだグループに入ってるかは決定的じゃないが、原作とは違い、運動神経抜群で、壁を駆け上がるぐらいはやってのける。

小柄な体格を生かし、銃弾を避け、急制動などで敵を翻弄する。

使用武器

スロージングナイフ

武藤と同じ。ただしワイヤーはついてない。

ついでに武藤特製の即効性神経毒が塗ってある。

さすがのヴラドもこれは回避できない。

効き目は長いが、ヴラド相手じゃもって数秒。

以上、平賀文の紹介。

設定の話 主人公紹介（後書き）

主人公設定 + でした。

一応まだアンケートも待ってますし、感想はいつでもOKです。
それではまた。

アスタ・ルエゴ！

三の話 中学時代（前書き）

ちょっとキンジ君の扱いがひどいかもしれないけど無問題。

三の話 中学時代

神奈川武偵高付属中学校。

通称、『中等部』。

ここは武偵の初歩、基礎を学ぶために作られた中学校。

俺は、今、その校門の前に立ち何をしてるかって言うと……。

「え〜と、体育館はーここから右に曲がって、赤い標識で左へ曲がれば……。っだあー！意味わかんねーよ！」

迷ってます。

いやあ、よくありません？新しい学校、新しい学年、小学生から中学生に上がる高揚感、新しい仲間たち。期待していくうちに歯止めが効かなくなり、先生の説明を聞き逃すというはめに……。

ぶっちゃけて言いますと、俺はただ単に先生の説明を、その前日の夜やってたゲームの所為で寝不足、故に爆睡して聞き逃したと言うオチだが。

「ああ、もう！ウダウダ悩むの禁止！即考、即答、即実行！やって失敗したら次に生かせ！盛大に自爆してやろうじゃないか！」

「あのお〜、体育館はここですよ？」

と近くの教員に目の前の扉を指される。

・・・ハズカシイッ！

入学式が終わり、クラスの割り振り表が張り出される。

え、俺は、と。

一年A組か、他のヤツらは・・・

美咲 B組。

亮 A組。

亮と一緒に美咲は隣か。

まあ、上々な結果だな。

どうせあいつのことだからクラスになじめずこっちに来るんだろ。

俺らはその後、近くの公園で集まった。

「ザンネンだったな、美咲。」

「うん・・・一人だけ別クラスだよお。」

「まあまあ。隣なんだしすぐ会えるさ。でも剛気君と一緒にだったのは嬉しいな。」

「その発言は誤解を招くぞ、亮。」

「いや、そこは冷やかashiより喜んでくれよ。ちょっとさびしいんだけど。」

俺らは近くの自販機で買ったジュースを片手に入学を祝いに来たいた。

「ねえ、剛気君。もし出来たらさ、今度僕に前見せた曲絃糸教えてよ。」

「別に良いぞ。そこまで難しいってほどじゃないから。」

「それじゃあ、私にも何か教えて!」

「そうだなあ、だったら今度ハツキングの仕方と、音を使う技術教えてやるよ。通信科とかそれ大事そうだし。」

・・・剛気は知らない、これが後の武偵高入学テストの大事件を引き起こすことに・・・。

その後別れ、俺は家で二人の訓練メニューを考えた。

やがて一年が立ち、俺らは中学二年。亮や美咲もそれぞれの技術も習得し、学年になじみ始めた頃。面白い噂を聞くようになった。

曰く、色仕掛けをすると何でも聞いてくれる便利屋がいる。

曰く、普段は地味な性格だが、豹変するとジゴロになる。

曰く、そいつの強さは半端無い。

・・・キンジですわかります。

さて、何でそんな話をしているかと言うと、

「お前らか？この女の子をいじめている奴等は。」

そう、何でか知らんが、俺は今キンジをけしかけられている。

しかも面倒くさい事に、キンジはそれを本気で信じていると言う点だ。

いくらヒステリアでジゴロキャラになっただって、盲目的に信じるわけじゃない。

いくらかの証拠が無いと動かない慎重なやつだったと思う。

と言う訳は、俺、はめられた？

「いや、違う。俺はそんな子は知らない・・・と言っても信じないか。」

「キンジ君、そいつが言ってる事は嘘よ！ユーが受けたいじめの仕返しやつちやって！」

「剛くんはそんな事しない！」

いつの間にか俺の後ろに亮と美咲がいた。

「剛くんはいじめなんてしないよ！幼稚園の頃から一緒だったもん、

「私はわかる！」

「そうだよ。それに、さらに言えば剛気くんはそんな非効率的な事はしないさ。面倒くさがりだから。」

俺の事を弁護してくれる二人。だがあつちは10人弱、こつちは3人。多勢に無勢だ。ついでに亮、それは褒めてんのか、けなしてんのかどつちだ？

「キンジ君そんなヤツラの言う事、聞く必要ないよ！早くやつちやつて！」

・・・これは「やつておしまい！」」「あらほれさつさつ！」」「フラグか？」

「そうだな、おれはみうたちを、守る。」

・・・少し、味方する相手を考えようぜ。にやけてるもん、後ろのヤツラ。

「このっ！よってかかって！剛くんが何したって言うの！」

「僕もこれは我慢の限界だよ・・・！」

俺は二人を手で制す。

「こいつのご指名は俺みたいだ。俺がやる。」

「でもっ・・・！」

「・・・わかった・・・。」

俺はキンジと向き合う。

「すまん、さて、どこでやる？」

「別に良いぞ、三人でも。俺はみつたちをお前から守らなきゃいけないからな。全員倒さないと安全じゃない。」

・・・こいつは、バカか。

「ぶっ！」

「く・・・くく・・・。」

後ろの二人も笑いをこらえている。

「何がおかしい？」

キンジは引きつった顔をしている。

「いや、テメエは俺を舐めすぎだ。断言してやる。お前は俺一人で十分だ。」

「後悔するなよ、その台詞。」

俺らは体育館へ移動した。

「武器は何か必要か？」

「いや、素手で良い。」

俺らは二人とも構える。

キンジは学校で習うクラヴ・マガの構え。

俺は、完全にそこに突っ立っているだけ。だが、これが俺の構え。俺の身体はどんな状態でも最初っからトップスピードが出せる。構えなど必要ないんだ。

「構え無いのか？」

「いや、俺が俺の構えだ。」

そう答えた瞬間、キンジは俺の左ひじを狙い、右手を突き出してくる。俺はそれを左足を大きく踏み出し、左半身になる事で避ける。

それによって背中側に回った俺はキンジの側頭部にハイキックを見舞う。

キンジはそれを前に転がる事で避ける。

「ほら、どうした。その程度か？」

「・・・いや、まだだ。」

そして、今ので対策が出来たのか、インファイトを仕掛けてきた。

右肩、側頭部、左ひじ、首、心臓、右足首、左手、左肩、肺、腹、右足、わき腹とありとあらゆる場所に打撃を叩きこみ、隙あらば掴

み技に移行しようとするキンジ。

それに対して、俺はそのすべてを手で軽くはじいてく。(軽くとは言うがそれは俺基準であって、実際には手が痺れる程度のダメージが通ってると思う。)

やがてその激戦は終わった。

キンジは俺の右肩を狙ったストレートを後ろに飛びさるように避け、距離を開ける。

「・・・はあ、はあ。」

「どうしたよ、もう終わりか？なら、こっちから行くぜ。」

俺は縮地並の速さで踏み込み、キンジが顔の前で組んだクロスガードを左膝蹴りでかちあげる。

その膝蹴りを今度はキンジの足元一歩手前で落とし、震脚、足を固定。

そして第二間接まで曲げた拳で腰の乗ったパンチをキンジの腹にぶち込む。

当たった瞬間に第三間接を曲げると言うおまけ付きで。

「二重の極み！アツーーーーー！！」

ズグッ、ドオーーーーー！！

最初の音はキンジが後ろに飛んでダメージ減らそうとしたところ、それでも有り余ったエネルギーで後ろに飛んでった音。

二つ目はそのキンジが後ろの壁に激突した音。

「ふう、疲れた。」

そして俺はキンジを俺にけしかけた奴らのほうに向く。

「やべっ、こっち向いたよ。」

「誰だよ、あの野郎ぶちのめそうだったの!？」

「アンタでしょ!」

「いや、ちがっ……ってゆーかアンタが遠山なら大丈夫だったんだろ!」

「そうだけど、ここまで強いつて知らなかったから仕方ないでしょ!それにやるうって最初に遠山に色仕掛けし始めたのみうでしょ!」

うざい……。なんて醜い言い合いだ。

「……それで遺言は済んだかテメエら。俺にちよっかいだした時点でテメエらは全員同罪だ。」

「うるさいわねっ!なんなのよアンタ!スカしててすっごくウザイのよっ!」

「知ったことかよ。俺がどんな性格してようがテメエに関係ないだ

「じゃあ、その喋る気をなくせば良いんだね？」

と、亮が言ってきた。

俺が後ろを向くと、亮は曲絃系用の黒い皮手袋をつけつつ、こつちに歩いてきた。

「剛気君。キンジ君、意識あるみたいだけど背中を強打した所為で立ち上がれないみたい。保健室につれてってあげられないかな？」

と俺に聞いてくる。

「いや、だがこいつら先に何とかしないと……。」

「大丈夫、こつちは美咲ちゃんとうにかしとくから。正直、僕も我慢の限界なんだ。譲ってくれないか？」

俺はしばし考え、

「仕方ないか、遠山はそのかさただけだし。やるなら徹底的にやれよ、後で問題になるのは面倒くさいからな。」

「わかった。安心して、そう簡単には終わらせないよ。」

俺はそれを聞き、キンジのほうに歩く。

「よお、遠山。生きてっか？」

「かろうじて、な……。すまん。ちゃん、とした、証拠も無い、

のに、口車に、のっちまって……。」

「まあ、しかたねえよ。人間に間違えるなって言うほうが酷だし。立てるか？」

「ムリ。背中より、腹が、めちゃくちゃいてえ。動くことすら億劫だ。」

「そうか、じゃあ肩貸せ。保健室までつれてってやる。」

そうして俺は肩にキンジを担ぎ、体育館を出た。

背中にこんな声を聞きながら……。

「小便はすませたか？神様にお祈りは？部屋のスミでガタガタふるえて命ごいをする心の準備はOK？」 亮

「遺言は済んだか？クソ猿共。」 どこからともなく出した禍々しいスポチャン刀（第二話参照）を装備した美咲

「「ぎゃあああああああ……！！！！」「その他女子。」

……任してよかったのかな……？

同じ事を考えてたのかキンジもこっちを見てくる。

……。

「こっぴつときは知らないふりだな。」

「・・・そうだな。」

いまだ続く絶叫を背に、俺らは保健室へ向かった。

この事件にかかわった女子は全員、その夜、意識不明の重態（精神的な）で見つかった。

事情を聞くころにも情緒不安定で事情聴取どころじゃないらしい。

この事件は後に、「二年女子強襲事件」と呼ばれた。そのまんまの名前だな。

三の話 中学時代（後書き）

今考えて見れば、神奈川だから東京に行くまで峰理子も、レキも、平賀さんも、出てこないんだった。

まあそれでは次回！

アスタ・ルエゴ！

四の話 中学二年の春休み（前書き）

設定の話少し変えました。

ちなみに中空知の銃は何が良いと思いますか？

何か思いつくのあったら言ってくてください。

武偵高まで進まなかった・・・。

四の話 中学二年の春休み

ぐくてん・たつぐ、武藤剛気だ。

あの事件からしばらく経った。

あの女子たちが異様に俺らに敬意を払うようになった事以外、学校に変化は無かった。

俺らにとって変化と言えば、キンジが俺らとつるむようになったことだな。

今は春休み。これから中三にあがると言う時期だ。そろそろ受験の言うものを考えなくてはいけない時期でもある。

「剛気ー、お前、もう高校決めた？」

キンジである。あの事件の後、保健室で一言二言話していたら以外に気が合う事を知って、名前で呼び合うようになった。他には亮は、『亮』。美咲は『中空知』に落ち着いた。

ちなみにここは前、中学進学を祝っていた公園だ。

「そーだな、武偵高の中等部入ってんだからやっぱ武偵高だよなあ。」

「僕としてはこの人たちがほぼみんなこぞって行く神奈川より、知り合いの少ない東京に行きたいかな。少し目立ちすぎたよ。これが若さゆえの過ちってやつかな？」

「ジジくさいぞ、亮。でも確かに暴れすぎたよなあ。ここまでなるとは思わなかったしなあ……。」

「そうだね、ちょっと反省。それに私からも言わせてもらえば、キンジ君の事知ってる人が少ない東京が良いと思うな。いらぬ騒ぎは起こしたくないし。」

俺の後ろにいた美咲が話しに参加してくる。

「……すまん。いろいろと迷惑かける……。」

「しつげえぞ、キンジ。あの事件終わってから何回目だよその台詞。」

「僕が知ってる範囲じゃ56回目だね。」

「……細かいな、亮。」

「うぐつ、す、すま」スマンついたらお前俺の特訓今日は地獄コースな。「……。」

そう、キンジも俺らの修行？特訓？みたいなやつに参加している。

俺がこいつに教えている技術は、はったりとか、でまかせとかで、相手の思考を操ると言う技術だ。操想術では無い。どっちかというところ心理学のほうだ。

なまじ、地力が弱いため、まずそこから鍛えて、その後力をつけていこう、ということだ。

「はあ、気にしすぎなんだよお前は。俺らはただ単に親友と一緒にいたいってだけなんだ、勝手にやってることなんだよ。」

「そうか、ありがと。そうだ、今度家にこないか？兄さんが使ってた武偵高の教科書とか貸してもらって読んでみようぜ。」

「ああ、お前の兄さん武偵なんだっけ。良いよ、都合がつかないついで。」

「僕も大体暇だからね。たぶん大丈夫だよ。」

「私は春休みは剛くんの特訓で大体潰れるから予定は入れてないよ？」

「・・・そうだったのか。ほぼ毎日来てるから大丈夫かな？と思ってたらそんな裏が合ったのか。」

「じゃあ、予定がついたら連絡するよ。」

「わかった、じゃあ、今日もいっちょがんばるか！」

そして俺らは三時間ほど訓練を続け、帰った。

そして後日、キンジの家に行く事になった。

「よお、いらっしやい。あがってくれ、ちゃんと兄さんから許可は取れたから古い教科書だけど読めるぞ。」

「お邪魔します。」

「お邪魔します。」

「お邪魔します。」

キンジの家は都内のアパートの一角にある部屋だった。

リビングに案内され、そこには山積みになった教科書類が。

「兄さんに武偵高時代の教科書を貸してくれるよう頼んだら、他にも役に立ちそうな本を本棚から引っ張り出してくれたんだ。」

「すごいな、銃のメンテのやり方とかあるぞ。」

「これは早撃ちの本だな。お前の兄さん西部劇好きなのか？」

「いや、使っている銃がコルト・ピースメーカーなんだ。」

「……へえ〜。」「」

「……、おかしいと思ったりしないのか？」

「何で？」

「いや、よく骨董品とか言われ『ガチャツ』ただいまー。」「『あ、兄さんお帰りー。』」

「……お邪魔してまーす。」「」

「お、君たちがキンジの言ってた友人か。俺の名前は遠山金一。今

は武偵をやってる。」

「武藤剛気です。弟さんにお世話になってます。」

「不知火亮です。右に同じくお世話になってます。」

「中空知美咲です。私も同じくお世話になってます。」

「あはは、お世辞は良いよ。逆に弟が迷惑かけたみたいですよまないね。」

「いえ、結果論ですけど今親友として仲良くやってるんで気にしていません。」

「そうか。良い親友をもったな、キンジ。」

「ああ、俺の最高の親友だよ兄さん。」

とそこで金一さんは台所に向かい、コップにウーロン茶をいれ、持ってきた。

キンジの隣の椅子に座り、俺らに向かって話しかける。

「君たちは武偵高に行くんだって？やっぱり近場の神奈川学校か？」

「いいえ、少し中等部で派手にやらかしすぎたんで、少し遠めの東京に行こうかと。」

「ああ、最近新しくなったらいいね。良いんじゃない。ん、ああ、ごめんその本はあまり関係なかったね。引っ張り出すときについて

きたんだな。」

と、金一さんは早撃ちの本を手に取る。

「懐かしいな、これの本を頼りに練習してた日々が。」

「あ、そう言えば。剛気、さっきの話しに戻るけど何でピースメーカーをおかしく思わないんだ？武偵の銃としてはあまり良いものではないと思うんだけど……。」

「そうだねー。よく言われるよ、そんな銃で良いのかって。昔から使ってるからいまさら変えられないけど。」

「たしか……、武偵憲章5条。行動に疾くあれ。先手必勝を旨とすべし。って言うのがあるじゃん。ピースメーカーならそれがとっても速いんだよ。早撃ち極めた人なんて0.02秒で撃てる人もいるからね。」

「それでも装弾数の問題であまり使う人はいないんだけどね。」

ああ、そういう点でか。

「金一さん、空っぽの状態でピースメーカー貸してくれませんか？」

「本当はそう言うことしちゃいけないんだけど、君たちは武偵の卵っていう事もあるし、特別だよ？」

と渡されるコルトSAA。

「キンジ、俺は今から早撃ちをやる。お前は何回撃ったか数えてみ

る。」

俺は立ちあがり、念のため開いている窓に向かって、構える。

「準備出来たら言ってくれ。」

「良いぞ、頼む。」

と俺は一気に抜きハンマーを引き、トリガーを引く。

ギイッッッン！

「どうだ？」

「？一発じゃないのか？」

「僕は二回聞こえた気がするけど……。」

「私も一回だと思う。」

俺はそこで不適に笑い、

「残念、正解は「四回だね。」金一さん！」

そこでいつちやいますか金一さん！

「四発？一回しか聞こえなかったぞ？」

「僕は手がハンマーの上に行くのはわかったから二発って思ったんだけど……。それ以上だったなんて。」

「私も一発だと思いました!」

「いやあ、俺も初めてみたよ。最初に右手の親指で引いておき、撃つたら今度は左の親指でフアニング、その次は中指、そして最後は小指で終わり。すごい四連発だね。」

フアニング・・・ハンマーを指で押し倒すこと。 2・・・これは実際に出来るかと言われればほぼ不可能の部類に入りますけどそこを何とか我慢して下さい。

「説明までとられちゃったよ。まあそう言うことだキンジ、この銃は早撃ちではトップを争う銃だ。気付いたときには銃は飛ばされ、足を両方撃たれてるなんて事ができる。無力化するには取って置きかもな。」

「そうなのか、でも弾切れのとき一つ一つ装填するから時間がかかるよな?」

「それはシリンダーとかで短縮できるぜ。」

「それに俺みたいになれてくるとこんな曲芸も出来るぞ。」

と六発の銃弾を左手にもち、右手のピースメーカーはハンマーを半分降ろし、ローディングゲート(弾を入れるところ)を開き、立ち上がる。

ジャッ!ジャキンッ!

そして、銃弾を宙に投げ、右手を右から左に尻ぐように振るう。

そして宙にあった銃弾は消え、弾倉の中にはまっていた。

「ほら、大体、自動式の弾倉取替オートマ
マグチェンジと変わらないだろ？」

「そんなのできるの兄さんぐらいだよ……。」

「……否定はしない。」

そんなおふざけも交えつつ、金一さんの武勇伝とか、武偵高の授業の事とか聞いて、その日は帰って行った。

四の話 中学二年の春休み（後書き）

指摘、感想あればください。それは作者にとってアイス並に欲しい
ものですから。

ちなみに、ここで出てきた技は、本当にあつた技を少し変えたもの
ですので事実無根と言つわけではありません。

それでは、

ハスタ・ルエゴ！

五の話 インターン（前書き）

武藤に妹がいた事を俺は今日知った！

原作7巻を読み直していたとき、252ページで同じ車輻料にいる事が判明。どうしよう。

ちなみに少しスランプ入りました。

五の話 インターン

ぶえのす・たるです、武藤剛気です。

金一さんから話を聞いた日から三ヶ月ぐらいが経った。

俺らはちよくちよく金一さんが都合のつくときに話を聞きに行った。

どうやったら効率よく単位が取れるか、どういう風に単位習得とみなされるか、少しでも単位を上げるにはどうしたら良いかとかを金一さんの経験談を含めて教えてもらっていた。

偶に家に行つて、金一さんがソファで爆睡している姿を見て、頬をつついたりして見た事もある。(そのときキンジは冷や汗がダクダクでてた。本当は病毒使いですつきりとした目覚めができるような睡眠ガスを金一さんにかけていたが。)

ちなみに一回、爆睡している金一さんに操想術で百人のキンジに追いかけられる夢を見せたら、その二十分後に跳ね起き、テーブルで勉強していたキンジに向かつて、「多少目に毒だとしてもなあ！俺にはそんな趣味はないぞキンジ！」と叫んだ。何を言ってるのかわからない(俺は知ってるが)いきなりどうした、さっきまで寝てたじゃないかとキンジに言われると、夢でキンジに掘られるところだったらしい。そう言えば操想術は恐怖をあおる術だっけ、と説明されてるときに思い出した。

それはさておき、俺と亮と美咲はインターンとして神奈川武偵高に行く事になってしまった。

成績優秀者と言う名目で武偵高に見学していくというものらしい。

(金一さん曰く)

キンジは一年の頃の成績が響いて、これなかった。

俺らは歩いて8分程度の神奈川武偵高で見学をしていた。

なんか好きな学科を見学できるらしい。

と言うわけで、俺は車輛科に、亮は強襲科に、美咲は通信科に、それぞれ分かれていった。

俺、武藤剛気の場合。

「インターンで来ました、中等部の武藤剛気です!」

「おお、いらっしやい。ちょうど良い、ここにいますという事は学科は車輛科を目指すのかい?」

「ええ、そのつもりですけど・・・。」

「なら、これの試乗して見ないか?」と指されたのはGT-R M・Spec N?r。

「スカイラインですか?良いですけどこれどうかしたんですか?」

「いや、車輛科この技術をすべて余すことなく使ってフルチューンし

たのは良いけど、じゃじゃ馬過ぎて誰も乗れなかったんだ。そこで来たインターン君に試して見ないかって事。」

「良いですけど、安全ですよね？」

「・・・車検いけるかいけないかの瀬戸際だね。」

「それ危険なんじゃあ・・・。」

「まあまあ、気にしない気にしない。ほらほら、乗ってみてよ。」
促されるままスカイラインに乗る。

今の俺は身長170センチはあるから普通に座れた。

「じゃあ、気が済むまでサーキットを走ってみてよ。こっちはデータ取りさせてもらうから。」

「良いですけど、要するに実験体ってことっすか？」

「ぶっちゃければそうだね。」

・・・よし、決めた。前見たレースとかで盗んだ技術、余すことなく遣ってやるうじゃないかあ！

「よし。こっちは準備オツケー。いつでも良いよ。」

「わかりました、それでは。」と俺は思いっきりアクセルを踏み込む。

「先輩！すごいですよ！一回も壁にかすったりしてませんよ！」

「最高速度320・・・？直進で走ってるようなものじゃないか！」

「減速しても280以下に行かないだと・・・、なんてテクニクだ・・・。」

「データをさらに詳細化しろ！すべての機材データ収集にまわせ！0.1秒たりとも逃すな！」

・・・カオスでした。

不知火亮の場合。

「どうも、中等部から来た、不知火亮です。」

「おう、よろしく。早速で悪いが今日先生が休みで臨時に東京から先生が来るらしい。今日はその人の授業になると思うから、武器を選んで並んでくれ。」

「わかりました。」

どうしようか、武器と言えばもう曲絃系があるんだけど・・・。

武器の並べてある棚を見ると一つの銃が視界に入った。

H & a m p ; K M A R K 23。剛気君が「亮だったらこれが良いと思うよ。」と言っていた銃だ。

信頼性が高く、耐久性も高い。言うならばオールラウンダーな銃。

僕はそれを手に取り、構えてみる。・・・しっくりくるような気がした。よく手になじむ。

僕はそれを借り、腰のホルスター（これも借り物）に入れる。

そして、武偵高の生徒たちと一緒に並ぶ。

その数分後、先生が入ってきた。

長いポニーテールを垂らし、正確なしんちょうはわからないが190越えと思われる体格。

つり目の東洋系の顔をした女性だった。

「ウチは東京武偵高の強襲科の教師、蘭豹や。ここの先公がおっちんだつつう事で臨時で来てやった。今日は面倒くさいから、殺し合ってもらうわ。」

ざわ・・・ざわ・・・と周りの人たちがざわめく。

「形式はバトルロワイヤル！最後に立ってたやつが勝ちや。」

わかりやすいね、だったらもう準備をはじめよう。

「そろそろはじめんど、準備は効かなくても済んでるよなあ？」

そうだね、もう張り巡らせてあるよ。

「んじゃ！はじめえ！」

その合図とともに、僕は右手を床に向けて思いっきり引く。

そうしたら十数人がまるで見えない糸に引っ張られるかのように浮かび、もがきながら止まる。

「何だ、これはあ！」

「身体が思うように動かない！」

「いたっ！腕にく、食い込んでるよおおお！」

その次に僕は右手の人差し指を曲げる。

そしたら彼らを引っ張っていた糸は緩み、落ちる。

他の人も巻き込んで……。 (これで30人は気絶)

その光景に唾然としていた残りの7〜8人は銃で無力化した。

この出来事にかかった時間、12秒。

「まだまだだね。剛気君ならもっと早くできる。」

「へえ、その剛気つてのがそれをお前に教えたやつか。」

蘭豹って名乗った先生が僕の後ろから話しかけてくる。

僕はそちらを向き、

「はい、僕の師匠的な友人です。」

「おもしれえやつだなあ。それは鋼糸か？珍しいな。てめえ名は？」

「中等部の不知火亮です。」

「中等部？なんでそんなやつが・・・ああ、そうかインターンか、なるほど。」

「そう言うことです。」

「おい。お前、高校は決まってるか？」

「はい？高校ですか？東京の武偵高を受験しようとは思ってますが・・・。」

「そうか、そうか・・・。学部は？」

「強襲科ですね。一番自分に合ってますので。」

「ならばよし。ん、だらしねえなあ。たかが十メートルぐらいから落つことされたからって気絶するなよ。」

と彼女は他の武偵高生に向き直り、ため息をつく。

「ああ、あがって良いよ、こいつらの根性叩きなおさなくちゃいけねえからな。他のところ見学して来い、何か言われたらあたしの名前を出せ。そうすりゃいける。」

「わかりました。ありがとうございます。」

そうして僕は車輛科の建物のほうに向かった。

中空知美咲の場合。

面倒くさいとか、手抜きとか言われるかもしれないが、通信科の授業でギャグを出すのは今のところ無理そうなので省略。（希望者がいるならば、後日閑話として出します。）

そして舞台は車輛科に戻る。

あの後30週ぐらい回ってガソリン切れを起こしたスカイラインをガレージにしまい、美咲たちと合流した。

「どうだった？武偵高は。」

「・・・少し物足りなく感じたかな。」

「私はいろんな音の解析方法がわかってよかったです！」

「そうか、じゃあ早く帰ってキンジに土産話してやるとするか。」

「オーケー。」

「いいよ〜。」

そして俺らのインターンは終わった。

五の話 インターン（後書き）

ちなみにアリアのバスカービルに対抗して（と言っても敵対じゃありませんが）武藤たちが作るチーム名はどうしたら良いでしょうか？何か良いアイデアあったら教えてくださいお願いします。

それでは

アスタ・ルエゴ！

六の話 中学から高校へ（前書き）

やっと武偵高入学までこぎつけた・・・。

少し文が雑になってるかもしれない注意してください。

そしてPVが1万突破！ユニークも千を突破しました！

ありがとうございます！

六の話 中学から高校へ

インターンの日からしばらく。

今までの所業や、インターンの日の出来事の所為で二つ名をつけられるようになってしまった。

俺は『暴走列車』。たぶんあの日のサーキット爆走が原因だと思われる。

亮は『鬼蜘蛛』。なんとも厨二病だが本人は満更でもないらしい。鋼糸を使って空中に立ったり、蜘蛛の糸みたく相手を簞巻きにする事からきたと推測。

キンジは『仮面舞踏会』。俺が課した特訓が功をなし、心を読むぐらいの事をしないと本心がわからないという詐欺師並の演技力と肝っ玉をもつようになった。

美咲は『緊急停止装置』。これは中等部の教師からつけられたあだ名だ。めったな事にならない限り、美咲と一緒に暴走しないため、俺らの手綱として存在していた。(一緒に暴走したら教師陣からは収まるまであきらめるとまで言わしめた不良品だが。)

さて時期は受験。

俺らは中等部に張り出される簡単な単位任務をやりつつ東京武偵高の入試を受ける事にした。(中等部の余剰単位は武偵高で引き継げるらしい。)

俺は車輛科の試験を。

亮とキンジは強襲科を。

美咲は通信科を。

そんな日の朝だった。俺らは東京駅に集合し、全員でバスで武偵高に行く予定だった。いや、これじゃ何か不都合があったような言い草だな。武偵高につくまでは問題はなかった。

問題はついてからの話だった。

俺と美咲の開始時間まで50分ぐらい余裕があったため、俺らは亮とキンジの見送りに来ていた。

キンジたちと一緒に試験会場の三階に行く途中だった。ちょうど二階に着き、渡り廊下を渡ろうと角を曲がったときだった。

「助けてください！変な人が……。」

と叫びながら、その人はキンジに激突。その双子山でキンジの顔を挟んでいた。

・・・これは、アレか、ラッキースケベと言うやつか。

「アレエ？なんか先客が来てる見たいじゃねえか？」

と如何にもDQNですと言いたげな恰好をしたやつらが来た。

「ち……違います、この人は……たまたまぶつかっただけで……」

「！」

とキンジの上から飛びのきつつ、起き上がる女子……と言っかこ
こまで言ったらわかるだろうけど、星伽白雪。

そしてその下にいたキンジはゆっくりと立ち上がった。だが、顔が
うつむきがちで見えない。

ついでに雰囲気普段と違うので、ああ、これはなった(……)
など気付く俺ら。

「悪いナア、その姉ちゃんは俺らと遊ぶ(……)予定なんだよ。」

とキンジの肩に手を乗せ、顔を見ようと少し顔をかしげるDQN1。

「なーに、なんだったらお前も俺らの後に……。」

その先はなかった。いや、言えなかったが正しいか。

キンジが手でその頭を押さえ、顔面に飛び膝蹴りをぶち込んだから。

ドゴッ、ゴッッ

と音を立てて、崩れ落ちるDQN1。

「なっ、てっテメエ！」とDQN2、3が喚く。

「キンジ、手、貸そうか？」

「いや、俺一人で十分だ。」と断言するキンジ。

いや、確かに苦戦するとは思えないけどさ。

「はあ！ぶざけんやテメエ！」と殴りかかるDQN×2。

ゴツッ！ぐりっ、ゴキッ、ゴスゴスゴス！

あっという間にDQN2、3は片付けられた。

片付けた後、キンジは白雪のほうに向かい、

「ありがとうございます。私……ここの受験生で会場に行こうと
……。」

と礼を言っている白雪の前で屈み、

「そうしたらさっきの人たちに囲まれ……。」

「東京に来るからどんなに成長しているかと思えば、相変わらず危
なっかしいな、白雪は。」

とすつげえ気障つたらしい台詞をはき始めた。ちなみにこの事を知
っているのは、キンジが一回美咲のスカートがめくれあがったとき
なってしまって（そのときは初心だった）いきなり美咲を口説き始
めるから俺がボコし、目が覚めた後自分の一家の特異体質の事を説
明してくれた時から。

そして俺らはこれは止める（ボコす）まで止まらないなと認識。ピ
ンク色の空気を発生し始めたキンジたちを置いてく事に決定。

「キンジ、先行ってるぞ。」

それにキンジは片手で答えるように振り、泣きじゃくる白雪をあやすのに戻った。

俺と美咲はその後自分の専門科に向かい、試験を受けた。

ちなみに俺の場合は、

「車輛科は如何に早く、武偵を現場に届けられるかで決まる！と言うわけで、実技試験は30分で如何に速く車を整備し、ゴールまでたどり着けるかが競われる！」

という事でもう完璧にレース状態で試験は行われた。

ちなみにこの試験はえげつなかった。整備しなくてゴールに突っ走ればよくね？という受験者対策にそれを行ったら途中でエンジン不良が起きるように仕掛けられていた。

かくいう俺もちょっと思ったりもしなかったり。

結果？堂々の一位ですけど何か？

この実技試験でも教師陣はいたみたいで、終わった後に、「すごいドリフトテクニックだね。でも、街中ではやらないでくれよ？」と言われた。

それが俺の実技試験の顛末。

中空知美咲の場合。

え〜と、中空知美咲です。

通信科の試験は、「如何に性格に情報を解析し、それを現場に伝えるか」でした。

私としてはこの程度の事、朝飯前というんでしたっけ？まあ、とにかく簡単でした。

ただ、ハッキングによる妨害を先生たちがしてきたので、カウンタ―ハッキングしてみたら、一時武偵高のネットワークを混乱させてしまいました。（美咲は現時点で足も残さずペンタゴンにハッキングできる。）

その所為で試験後、教師に呼び出され、やりすぎだ、と注意されてしまいました。

でも、腕は買われたみたいですし、と褒められました。

褒められるなら剛くんに言って欲しかったですけど。

ないものねだりはいけませんね。

不知火亮、遠山キンジの場合。

不知火亮だよ。

強襲科のほうは、「如何に効率的に建物を効率的に制圧するか」という事で試験は廃ビルを使ったバトルロワイアルになった。ただ協力するのによし、単独行動してもよしというものだった。

そう言うことで早速曲絃系でキンジ君を捕捉、合流。

「どうしよっか、キンジ君。」

「そうだな、お前の曲絃系で索敵、俺が陽動になっておびき出し、お前が絞めるで良いんじゃないか？」

「それでいこっか。それじゃいくよ、キンジ君。」

「よろしく頼む。」

僕は曲絃系を展開し、敵を見つける。

「三階に4人。四階に12人。二階には教師が隠れてる。四階は今交戦中だよ。」

「わかった、まずは厄介な教師から排除するとするか。」

その後、教師たちを縛り、殴って気絶させ、放置。

後は自滅してくれたり、勝利の余韻に浸っているところを奇襲して全滅。

それが僕らの試験の顛末だった。

場所は変わって例の公園。

試験が終わり、もはや恒例となりつつある公園で試験終了の息抜きと花見を兼ねたドンチャン騒ぎをしていた頃。

「そう言えばキンジ、金一さん、今日来るっていつてたよな？」

「そつだな……。そろそろ来ると思うんだが……。」

ちなみにキンジはあのヒステリアモードの事で絶賛落ち込み中。

「ごめんなさい。少し遅くなったわ。」

と、いきなり誰とも知れない女性に話しかけられた。

その人は長い髪の毛を三つ編みにまとめ、背中に垂らして、服はロングコートの中に白いセーターらしきもの。下はギリギリひざ上の赤いプリーツスカート？でストッキングをはき、靴は編み上げのブーツ。

容姿で言えば『絶世の美女』だった。

「カナ！？なんで？」

「少し仕事が長引いてね、直接来る羽目になっちゃったのよ。」

「知り合いかい、キンジ君？」

「きれいな人ですねえ。」

「ああ、きれい過ぎるくらいにな。」

そう、変装術とかもやる俺にとってはカナと呼ばれる女性は『女性』過ぎた。

まるで男性が思い描いた理想の像並に。

「どういうことなんだい、剛気君？君も知ってるのか？この人を。」

「知ってるかなんて言うならここにいる全員知ってるぞ？」

「いえ、私は知りませんよ？こんなきれいな人。」

そしたらいきなり、キンジがこっちに来て、俺らを集めて、言う。

「アレは金一兄さんのヒステリアモードなんだよ。女性になりきる事でヒステリアモードになるんだ。兄さんは。」

「え？じゃあ、あの人は金一さん！？確かに面影あるような……。」

「じゃ、そう言うことで。」

と、今度は金一さん、いや、カナを交えてドンチャン騒ぎ。確かに最初は戸惑いもしたけれど、最終的には打ち解け、騒いでいた。

そして一カ月後。俺らは東京武偵高に入学した。

六の話 中学から高校へ（後書き）

もうちょっとで原作です。

がんばってつなげて行きたいと思います！

それでは！

オウ・リヴォア！

七の話 武偵高一年（前書き）

今回は長いです。

作者の全力を振り絞った結果がこれだよ！

七の話 武偵高一年

やあやあ。いつもおなじみ、武藤剛気だよ。

今日、俺らは装備科に銃の改造の依頼に来てる。

というのは建前で、俺が改造の技術を盗むために来ているというのが正しい。

ついでに平賀文に会って置こうという企みもある。

俺らは同じ学年でこつた返してる装備科の中を書き分け進み、探す。

そしたら、なにやら人がこつた返す中で一つの場所だけ開けていた。

俺は他の奴等に手で示し、（声では伝わらない可能性があるため）向かう。

そしたらやはりそこにいたのは小学生並の背をした彼女、平賀文。

といえども今の俺は名前を知らないはずなので当たり障りのない会話をぶつける。

「よお、繁盛してっか？」

そう言うと彼女はぴくっと肩を震わせ、俺の聴覚ギリギリの声で、

「冷やかしは受け付けてないのだ。」といった。

「冷やかし？いや違う。俺らはねつきとした客だよ。」

そう言ったら彼女は顔を上げ、きらきらした目でこっちを見てくる。でも、すぐ後ろにいた美咲が、

「剛くん、本気？ここ、他のところより高いよ？」と突っ込みを入れる。

それを聞いていた彼女は少し顔が翳るが、

「いいじゃないか、高くても。別に料金に糸目をつけてるわけでもないだろう？何せ僕ら中等部のとき依頼やるだけやって、報酬は貯金するだけだった所為で金は有り余るほどあるんだから。」

と言う亮の援護射撃にまた輝きを戻す。

「と言うわけでよろしく頼む。」

「了解なのだ！あややの名前は平賀文！え〜と、この書類に改造、または調節の依頼内容を書いて銃と一緒にこの皿に入れて依頼完了なのだ！ちなみに君たちが最初のお客様と言う事で、今回は特別に料金を三割引するのだ！」

と嬉しそうに言ってくれた。

だが、それを聞いていた俺らの内心は、『こんな客がたくさんいる場所で一人も来てないなんて大丈夫かな・・・？』と言うものだった。

「ん〜、えーと左からしらぬいくん、とーやまくん、なかそらちさん、むとーくんではないのさ？」

「そうだ、あつてるぞ。」

実は順番てきに遠山、不知火、中空知、武藤と言う順番なんだが。

「マテコラ、違うぞ平賀さん。俺が遠山でこっちが不知火だ。」

「あはっ！わかりましたなのだー！出来次第、メールで連絡しますなのだー！」

「あ、ちよつとスマン。頼みがあるんだが良いか？」

「なんなのだー？」

「銃の改造をしている所をみたいんだが可能か？」

「ん〜、手伝いをしてくれるのなら許可するのだー！」

と、言うわけで俺は三人と分かれ、平賀さんの作業場で手伝いしつつその技術を盗んだ。

改造が終わった日、俺は俺と三人の銃を受け取り、平賀さんに料金を払い、（本当に三割引してくれたお陰で普通の改造と変わらない料分で済んだ。）装備科を後にした。

そのとき平賀さん曰く、「毎度アリなのだー！また次回もごひいきに、なのだー！」

そして今俺らはその改造が済んだ銃をもち、依頼掲示板を眺めてる。

「ん、どうしようか。簡単なやつからはじめても良いし、こっちの少し難しそうなやつも良いな。」

「そうだね、僕としては簡単なやつからはじめたほうが良いと思うな。いきなり大事件と言うのも少し怖いし。」

「そうか？俺は単位が多いこっちの方が良いと思うぞ、そこまで難しそうには見えないし。」

「キンジ君、そういうものこそ難しいんだよ？でも単位が多い方があとあと時間作れそうだし、こっちの方が良いんじゃない？」

と美咲が指したのは犯罪予告があった宝石店の護衛。単位は2・0。

俺らはその依頼を請け負うとしたところに、

『緊急依頼！汐留方面にてテロリストと思しき武装集団の引きこもり事件が発生！人質の存在を確認。爆発物などの情報は入ってない。この依頼の単位は各人13・5とする。制限としてBランク以上の武偵のみ受注可能！』

・・・。

俺らは顔を見合す。

俺、車輛科のS

亮、強襲科のA

キンジ、強襲科のS

美咲、通信科ではAだが、情報科ではS。

言つまでもないだろう、俺らはその依頼を受注した。

30分後、俺らはレインボーブリッジを爆走していた。

前の神奈川で譲ってもらったスカイラインをさらにフルチューンさせた化物車で。

「剛気！後どれくらいで着くんだ？」

「このままのスピードで行きゃア3分ぐらいだ！」

『剛くん、その角を右に曲がった後、30メートル直進、交差点を左です。』

「了解い！」

ギュラララララララ！

アスファルトを焼きつつドリフト。そのままアクセル全開で交差点を左に曲がる。

『あと2キロ進めば目的地です。』

「了解した！おいお前ら！準備しとけよ！」

「もう出来てる！」

「左に同じく！」

ちなみに亮とキンジは後部座席に座っております。

目的地の30メートル前で停車、エンジンを切り、作戦確認。

「いいか、まず俺とキンジが壁をよじ登って3階から突入する。亮は俺らが突入したらすぐ後に一階に進入し、取りこぼしを片付ける。いいな？」

「了解！」

『作戦開始時間です。御武運を。』

「作戦開始だ、行くぞ野郎共！」

「おっつ！」

「わかったよ。」

俺とキンジは排水溝をよじ登り、三階の窓まで到着。

窓の鍵を曲絃系で開け、中に入る。

銃を構えつつ、周りを索敵。

そこで、黒い、スーツケースのような大きさの箱を発見。

ただ単に布がかぶせてあっただけなので、日光センサーがないか調べた後中身を見た。

それは絶対に500キロぐらいはある、コンポジション4、通称C4爆弾だった。

「おいおい、マジかよ。こいつら汐留丸ごと吹き飛ばすつもりか？」

「そんな落ち着いてられるかよ！早く解体しないと！」

ちなみにこの会話は当然小声です。

「そうだな。キンジ、周りの警戒頼む。えーと？こいつら爆弾は・・・。こいつ効率を重視しすぎてダメーすらもねえや。こことここをきると・・・。」ぷっつ

タイマーが停止した。

「あら、不思議。二分かからず爆弾は停止しましたとき。」

「そんなこといってないで早く二階に行くぞ！」

三階には誰もいない様なので二階へ。

「おらっ！テメエらちゃんと動けや！」

「はっ、痛い目見ねえとわかんネエのか？」

ともつそれはまるつきり三下の悪役っばいやつらがいた。

人質は二人。親子だと思われる。

母親と息子の二人組み。

手は縛られている。

人質の近くに3人。

入り口の所に4人。

部屋の隅の方でポーカーやってるやつらが3人。

合計10人確認出来た。

俺はキンジに突入の合図を送り、

「武偵だ！全員武器を捨てろ！」

と一応投降勧告してやる。

全員の意識が俺に向いた瞬間、キンジは人質の近くにいた三人を掌底、ハイキック、鳩尾にパンチで無力化。

そしてキンジも銃を構える。

最初は三人倒され啞然としていたやつらだが、俺らの服装を見て、笑い始めた。

「ぶ・・・、くく・・・。お前らはバカか？こんなところに制服で

来るなんて……ぶっ。」

そう、俺らは防弾制服で来ていたのだ。

だが、それには理由がある。確かに時間短縮の意味もあつたが、一番の理由は、

「勧告の無視、および武装解除の様子がないため無力化に移る。」

と俺は一気に5メートルは合つた距離を一気に詰め、扉の右側にいた男の顎を殴つて昏倒させ、二人目をひじうちでこめかみを貫く。二人は気付く間もなく気絶。

残りの二人は一気に距離を詰めた俺を見て一階に逃げ出した。

ついでにキンジはポーカーをやっていた3人のうち2人を拘束、もう一人は非常階段から一階にいったようだ。

「ふう、疲れた。」

「そんな運動してないだろ。それにしてもあっけないな、後は亮に任せれば良いし。」

「そうだな。撤収準備しとくとするか。」

とある三下テロリスト

なんだ、なんなんだあいつらは！いきなり三階の方から出てきたか

と思えば一気に三人倒され、その次は動きすら見えなく目の前の二人をやられた。

俺はアレほど恐怖を感じた事はない。まだインドらへんで傭兵まがいな事をしてた方がましだったと思ってる。

もうすぐで一階だ、一階まで行けば逃走用のジープがある。

と俺らが一階に着いて見た光景は、

輪切りになったジープ。

まるでクレーン車がこじ開けたかのように歪んだシャッター。

そこかしこのコンクリートにはなにやら切り傷が。

そして最終的にはジープを守っていた仲間が銀の糸で簀巻きにされていた。

その中央にやつはいた。

「ああ、こんにちは。ようこそ、僕の蜘蛛の巣へ。ここは僕の縛鎖結界。踏み入れたが最後、もう、逃げられないよ。」

とつぶやいたと思ったら俺達はいきなりなすすべもなく宙に引っ張られた。

「さようなら、次に気付いたときに見るものは刑務所の灰色の天井だろうね。」

と一気に拘束が緩くなり、俺は頭を打って意識を飛ばした。

後日談。

事件を解決した後、俺らは実力を認められ、表彰された。

それに伴い、単位が増えたり、部屋の大きさが大きくなったりと良い事はあったが、教師に依頼について指名されたらそれに従わなくてはいけないと言う制限がいついてしまった。

それはそうと時期は冬。

高校に入っの始めての冬だった。

金一さんの訃報が届いたのは。

『浦賀沖海難事故』

日本船籍のクルージング船・アンベリール号が沈没し、乗客一名が行方不明。

その行方不明の人こそ、我らが先輩、遠山金一だった。

乗員・乗客を全員避難させた所為で、一人逃げ遅れたらしい。

その事で起訴を恐れたクルージング・イベント会社、およびそれに焚き付けられた一部の乗客は金一さんを『船に乗り合わせていながら事故を未然に防げなかった、無能な武偵』と罵った。

それにより遺族のキンジには罵詈雑言の嵐。マスコミも（とはいえ

一部の週刊誌だが）それに便乗し批判した。

それによりキンジは塞ぎこみ、時折、白雪が見に行くことには食事
はちゃんととっているらしい。

キンジは今、忌引きという事でかれこれ6日、学校を休んでいる。

ちなみに残された俺と美咲（亮は単独で依頼遂行中）はというと、

「は？金一さんが死んだ？嘘でしょ、ありえないありえない。タン
カーの沈没に巻きこまれても生き残りそうだもん。」という事でい
ま日本の武装検事の情報ネットワークにハッキングをして情報を収
集している。

キンジはいまショックで気付いてないかもしれないが、金一さんは
今の俺にかろうじてだが勝てる存在だ。

そんな人が小型クルージング船の沈没程度で死ぬわけが無い。

ちなみに余談だが俺らの今やっているハッキングとはある武装検事
のパソコンのIDに偽造し、きちんと順序を追って接続しているた
め、ばれたりはいらない。

誰かが気付いたとしても、「（その武偵検事の名）がアクセスして
るよ。」としか見えない。

「剛くん！見つけたよ！」

早速見つかったらしい。

「ほら、『浦賀沖海難事件』について：本事件は浦賀沖を航海中だったアンベリール号に《武偵殺し》なるものが、武偵局特務武偵、遠山金一をイ・ウーに勧誘するために発生した事件だと断定する。故に第一級秘匿事項に値するため、これを海難事故とし、船は沈没、遠山金一武偵は死亡した事とす。』後は事件の資料だよ、リーダーの資料とか。」

「でかした、美咲。よしさつさとキンジにこの事伝えに行くぞ。」

「わかった。」

俺らはダツシユでキンジの部屋に向かい、ドアを蹴破り、キンジの部屋に突入。

そこで黒い瘴気を発しているようなキンジを見つけた。

「よお、久しぶりだなキンジ。」

「ああ、久しぶりだな。・・・はあ、剛気、俺はどうしたら良い？目標だった兄さんが死んで、人を助けたはずなのに憎まれる。こんなのもってありか？」

「・・・その事に関しては金一さんの自業自得も入ってると思うが・・・。」

「何だと！剛気、テメエ！」といきなり殴りかかってくるキンジ。

俺はそれを避け、腕を背中で拘束する。

「剛気！このクソヤロウ！テメエまでも兄さんが悪いって言うのか

「！」

キンジは拘束から逃れようと暴れるが、怒りで我を失ってめっちゃくちゃな事をしているため拘束は簡単だった。

「落ち着けキンジ、誤解だ。俺がいつてるのは事故の事じゃない。」

「ならなんだっていうんだ、クソッ！」

「いいか、よく聞け。金一さん、遠山金一は、生きている。」

「はっ？」ぴたりとキンジの動きが止まる。

「もう一度言うぞ。遠山金一は、生きている。」

「に、兄さんが生きて・・・いる。」

「そうだ、これからそれを説明してやる。まあ、座れ。」

と部屋の隅にあつたちゃぶ台を引っ張ってきてその反対側に座らす。

「キンジ、これから渡す資料は一切他言無用だ。家族だろうが、友人だろうが、お前の恋人だろうが関係なく他言無用だ。自分のトイレに向かっても、自分の妄想の中の彼女にも、お前のペットの金三郎にもだ（金三郎・・・前に祭りで取ってきた金魚）。」

「あ、ああ。」

「これはな、最初の一文を知っただけでもその存在を戸籍からビデオシヨップの会員証まで消される類のものだ。それでも読むか？」

「読む。兄さんの行方がわかるなら、読む。」

「そうか、これがその資料だ。」

とキンジに資料を手渡す。

キンジはそれを読み進んでいくうちに、涙目、涙、大粒の涙、号泣と涙の量が増えていった。

最後は「よかった・・・兄さんが、生きててよかった・・・！」と号泣以上に泣いていた。

そしてしばらく後、亮も合流し、状況を資料で説明。

あの暗い雰囲気は抜け、安堵しきったキンジを交え相談していた。

「この『イ・ウー』ってのは第一級の秘匿事項になるぐらいの犯罪組織らしい。そんな組織に何故金一さんが・・・？」

「たぶん兄さんのことだから内部から崩壊させようと狙って勧誘に乗ったんだと思う。と言うか、それぐらいしか思いつかない。」

「たぶんそうだろうね、でももっと重要なのはこれからどうするかだね、しばらくキンジ君には暗い雰囲気纏う演技をしてもらわなくてはならないんだけど・・・。」

「演技なら得意だ。問題ない。」

「ならいつか。それじゃ、今日はここまでにしてまた今度来るよ。」

「私も帰らなきゃ、剛くん、帰ろっ?」

「そうだな。じゃあな、キンジ。」

「ああ、ありがとう。みんな。」

と俺らは分かれて帰った。

後日談。

あの『無能な武偵』見たいな記事についての話しになるが、その話を見た、焚き付けられたほうではない後の残りがクルーディング会社に起訴を起こしたらしい。

内容は『自分達は彼のお陰で生き残れた、彼がいなければ死んでいた。それに対して侮辱するなどは名誉毀損だ』と言う事でクルーディング会社、焚き付けられた一部の雑誌に記載された人たちが起訴され、金一さんがSランク武偵だったこと、任務の失敗数が非常に少なかったこと、そして任務の数が膨大であった事から、遠山金一は優秀な武偵であったとし、クルーディング会社は有罪。

キンジは遺族と言う事で担ぎ出され、莫大な慰謝料を受け取った。その慰謝料を受け取ったキンジの顔はそれはもう盛大に引きつっていた。

七の話 武偵高一年（後書き）

かゆ・・・うま・・・。

八の話 青春のバトル(たぶん)(前書き)

戦闘描写がうまく行かない……。
どうにか鍛えられないものだろうか……。

八の話 青春のバトル(たぶん)

やあ、武藤剛気だ。

俺は今焼き肉屋に来ている。

ちなみにこれはキンジのおごりだ。

前回の裁判のお陰で慰謝料がたんまりと転がり込んだキンジ。

だが、そのちよつと前に受け取るきつかけとなった金一兄さんは生きている事が発覚。

さて、この金はどうしようかと、いうところに亮が

「焼き肉行って見ない？」

と発言。

そしたら俺と美咲が、

「焼肉？久しぶりだな、いいんじゃない？」

「焼肉、ね。うん、どうしよっかな。え？剛くん行くの？じゃあ私も行くー。」

と賛同。

そういうことならば、とキンジは

「じゃあ、俺のおごりで。」

と言い、そのまま来たと言っわけだ。

「もごもぐ、うまいな。久しぶりに食う焼肉は。」

「そう？私としては昼食に食べるには重すぎると思うんだけど。」

かく言う美咲もホルモンやら、塩タンやら多めに食べている。

「せつかくの奢りなんだよ、食べなきゃ損だよな？」

とのこと。

「なあ、みんな。少し聞いてもらって良いか？」

「「「なんだ（い）（ですか）？」」「」

「おれ、探偵科に転科しようと思ってるんだ。」

「どうしたんだ、いきなり？」

「そうだよ。唐突過ぎると思うんだけど。」

「右に同じ。」

そうするとキングはすこしたじろいで、

「いや、なんかこう、俺らに足りないもので俺にできる事って言う

たら探偵科かな〜っておもってさ。別に強襲科がいやだってわけじゃないんだが、一つでも多く経験をつんでおこつかなと考えたところそこに行きついた訳だ。」

「なるほど、で、建前はそれとして。本音は？」

「兄さんに少しでも近づければ、ってね。」

「」「キンジ（くん）がまともな事言ってる……。」「」「」

「オイ、マテコラ。お前ら俺をどんな目で見てやがった！」

「スケベ。」

「変態。」

「右に同じ。」

そう言われたキンジは信じられないと言わんばかりの表情で、

「何でそうなるー！」

と怒鳴った。

俺は白い目を向けてきた周辺に謝りつつ、

「だって、性的に興奮したらパワーアップするなんてモロすけべなキャラじゃん。」

と言いはなった。

それを受け、キンジは黙考し始めた。

そして少しずつ、ずん、ずん、ずん、ずん、と纏う空気が重くなっ
ていく。

「そうだな、俺はスケベなキャラだな、どっからどう見ても……
……。」

最終的にはそんな台詞を残し、沈んだ。

俺らは普通に食い、キンジは途中から復活して、やけ食いし始めた。

その後、亮は食いすぎたキンジを背負い、寮へ。

俺は美咲をつれ、第三女子寮へ。

「ん、キンジくん探偵科行っちゃうんだねー。」

「そう見たいだな、だけど自由履修でこっちに来るらしいぜ、時々。」

「そうなの？じゃ、いつか。」

そして寮の前に着く。

「ありがとう、送ってくれて。また明日ね。」

「ああ、また明日。」

と別れる。

その三日後。

「キンジイイイイイイイイイイイイイイイイイ!!」

「剛気イイイイイイイイイイ!!」

ととてつもない気迫で殴りあう二人が強襲科で発見された。

何故だ………。

きっかけはその6分前ぐらいのことだった。

「キンジ、もう転科届出したのか?」

「ああ、来年から探偵科だ。」

俺は少し何か面白いものは無いか?と考えていると、

そこに蘭豹が通りかかり、

「おう、お前ら、どうしたごーちゃん?悩み事か?」

……だれ?と思うのは必然だろう。

アレは一学期中旬だったか、俺らはグループで固まって昼の奢りを賭けてバトっていた。

俺と美咲、キンジと亮。二つのチームに分かれて、昼の奢りを決め

るといふルールでバトルが俺らの特訓の主なメニューだったからだ。チームは変わったりもするが。そんなときだろつか、蘭豹が乱入してきた、俺らに「おもしろい事やってるなあ！混ぜろや！」と言いはなった。

俺らはそれならば、と彼女にもこのバトルのルールを説明し、どうですか？と聞いて見た。

「いいじゃねえか！てめえらぶち殺して奢らしてやらあ！」

が返事だったので、俺ら四人対蘭豹という構図が出来上がった。

後は、まあ、ひどかったと言おうか。それだけじゃあ言い表せないが。

俺、キンジ、亮がフロント、美咲がバック。

亮が鋼糸で身体を縛り、俺とキンジでフルボッコ。

それを抜け出せたと思ったら美咲の音使いで身体が麻痺。またもや俺らでフルボッコ。

それすら抜け出したら今度は俺の羽交い絞め。そしてキンジは百烈拳もどきを叩きこむ。

それによって被害が、窓ガラス（80cm×120cm）40枚、床のフローリング、ほぼ全滅、屋根には大穴、壁は斬撃痕だらけと言っざまに。

ついでにそれ全部蘭豹が負担。それにプラスして俺らの昼飯を奢っ

たんだからもう悲惨だった。

たとえるなら、病んでるモードに入った白雪の如く黒い負の感情が漏れ出ていた。

さすがに俺達も悪く思い、彼女にストレス発散のために本を贈った。

その本は『クビキ サイクル』。

赤色だし、大女だし、香港のときの呼び名は『無敵の武偵』だから、これよくね？と思いついた結果、それを買って送った。

最初はあまり受けはよくなかったが読むにつれ目が輝いてきた。

それはもうすごい熱中ぶりで、俺はなんとシリーズすべて奢らされた。番外も含めて、だ。

買ってからと言うものの、彼女の性格は豹変した。あの、『赤色』そのものと言って良いぐらいに。

さすがに『人類最強』までとはいかないが、それなりに強くなった。

彼女曰く、戯言シリーズは『あたしの心のバイブルだっ！』。

ああ、話がずれたな。でだ、なぜこうなったかだ。

実は蘭豹がキンジの転科を知り、（まあ、教師だから当たり前か）それについて『別れは熱い殴りあいじゃ決まってるだろ！』と言い、それに便乗した美咲が、『じゃあ、負けたほうは春休みの旅行の費用全額負担ね！』と言った。

それは、だ。剛気が情け容赦なく本気で殴ってるからだ。

考えてもみてくれ、ネットや本にあった技をパクル事ができる剛気はありとあらゆる格闘技をコピーしてきた。それに加え、『人類最終』は『人類最強』とためをはるほどのスペック。

それを普通の状態のキンジにどう防げと言うのだ。確実にムリだ。

その結果、サンドバッグになった。

「トドメじゃアアアア！」と剛気は震脚、そしてそれで生じたエネルギーを足から腰、そして胴、肩、腕、掌底へと螺旋状に伝える。俗に言う『発勁』と言うやつである。

「グブツ、ゲホオっ！」キンジは思いつきり喰らった。

ちなみにまだ意識はある。なぜならこのキンジの真骨頂は頑丈さだからだ。亮の鋼糸を喰らい、美咲の蹴りを喰らい、剛気の拳を喰らう。必然的に頑丈になっていった。

と、それは措いておいて。

それを喰らったキンジは吹っ飛ばされる。

ついでに言うと、このバトル、拳銃を使ってないため防弾ガラスのシャッターは降りてない。

観客まで吹っ飛ばすキンジ。

ちょうどそこにはSSRから見学に来ていた白雪がいた。

巫女服で。

さて、ここからは筆者の推測になるが、呪術をするときに下着は着けるだろうか？襦袢は着るだろうが、下は？女性が禪と言うのはアニメなどでは聞いた事があるが、現実では聞いた事が無い。筆者の女友達は（訊いたわけではなく、相手が剣道の事を話している途中に言っていた。）剣道の袴の下ははいてない、すなわちノーパンであると云っていた。

さて、何故こんなくだらない事を述べたかと言うと。

巫女服＝袴。SSRから来た（直行）＝さっきまで何かしらの呪術的な何かをやっていた。

ついでに白雪みたいな大真面目なキャラがちょっとでも妥協するイメージが思い浮かばない。（もし、そうだったとしてもこの小説では真面目すぎたと考えてくれ。）

すなわち、穿いて無いのである。

で、キンジは運良く（ラッキースケベと言う）、白雪の右足の内股側へ……。

ちなみに白雪はキンジがやられていた心配の所為で足を肩幅に広げていた。

要するに、袴のすそから見てしまったのだ。

聖域を。

後はもうわかるだろう、ヒステリアモード発現。

立ち上がり、白雪に「すまないな、心配させて。大丈夫だ、勝ってくる。」と低いジゴロ声で言っつて、また剛気の方へ足を進める。

「ふえ……?」と反応が追いついてない白雪。

ちなみに他の観客にはキンジが白雪の袴の中を見た事に気付いてない。

なぜなら、まずキンジのヒステリアモードの発動条件を知らない。次に傍目から見ると白雪の足元まで吹っ飛んで、立ち上がり、また戻って行った様にしか見えなかったからだ。

それはさておき、バトル再開。

「役得だったんじゃないか？キンジ。」

「ふっ、たえそうだったとしてもお前は自分の負けを呼び寄せたのさ。」

やはりさっきのように剛気は殴る蹴る打つ叩く当てる。

だが、キンジはそのすべてを余裕持って防ぎ避け捌き外す。

それが十分ぐらい経ったころだろうか。

二人は一気に距離をとった。

「キリが無い。次で終わりにしてやる、キンジ。」

「終わるのはお前のほうだ、剛気。」

「ホザケエエエエエエ！」

「ウラアアアアアア！」

そしてまた肉薄する。

剛気が放つは自分の最高速度からの踏み込み、それを震脚で固定、床をへこますほどの運動エネルギーを崩拳として繰り出す。

キンジが放つたのは同じく最高速度からの踏み込み、そしてすべての関節を瞬間的に同時に

伸ばし、拳を叩きこむ、原作で言う『桜花』の徒手空拳バージョン。

最初にキンジの拳が剛気の胸に破裂音を鳴らしながら当たる。だが、剛気は止まらない。いや、使っている運動エネルギーが強すぎて止まれなかった。

そして剛気の崩拳はキンジの腹に決まる。

キンジの拳はそのままつき進み、剛気の肋骨をへし折る。

剛気の崩拳はキンジの内臓をしっちゃんかめっちゃんにかき回す。

結果、『ぐぼあっ！』両者、血反吐はいてノックダウン。

二人は衛生科に搬送された。

怪我は全治二週間の重傷。

二人は仲良く同じ病室で痛みにもだえる結果となった。

ちなみに勝敗が引き分けであったため、旅費は二人で割り勘した。

八の話 青春のバトル(たぶん)(後書き)

ちなみにここで『桜花』使ったのでシャーロック戦は別の技になります。

どんなチートな技にしようか……………。

閑話 『平賀』GENE』文(前書き)

これは平賀文をま改造して見たらどうなるのか?と云う名目で書いた番外です。

これは本編にまったく関係ありません。(たぶん)

こんな運動神経もった平賀文は平賀文じゃない!と、言う人は見ない事をお勧めいたします。

ちなみにこれは40000pvと50000ユニークを突破した記念みたいなものです。

閑話 平賀『GENE』文

ある日、お台場に小柄な少女の姿があった。

「
」

陽気に鼻歌を歌いつつ、スキップで進む彼女の名は、『平賀文』

装備科の天才児である。

「今日も良い天気なのだー。」

のんきに空を見上げ、わはーと言わんばかりの表情で歩き回る。

そんな彼女が突然立ち止まった。

そのきらきらした目の先には玩具店、詳しく言えばその店頭店頭に販売されている熊のぬいぐるみを模した椅子だった。

「……か、かわいいのだー！」彼女はその椅子をぬいぐるみに気に入っただよう
だ。

そして彼女の目は値札の方に行く。

「た、足りないのだー……………」

というわけで彼女は銀行に向かう。

ん？別にATMでも良いじゃないかって？

考えてもみよう。小学生並の背の彼女がATMのパネルに届くと思
うか？

届くわけが無い。

さてそういう訳でやってきた銀行。

金を下ろしに来た彼女は窓口でカードを差し出し、

「二万円引き下ろしにきたのだー！」

と満面の笑顔で言う。

それをみた店員は「お譲ちゃん、このカードどうしたの？」と訊く。

「ん？それは文の貯金を入れたカードなのだ！」

とまたもや笑顔で言う彼女。

「じゃあ、身分証明書持つてる？」

と言われ、

「これで良いのだ？」と武偵手帳を取り出す。

「……………確かに承りました、二万円の引き下ろしですね？」

「そうなのだ！」

「かしこまりました。しばしお待ちください。」

ガーンと機械が二万円を吐き出す。

「こちらが引き下ろし金になります。ご確認ください。」

と二万円札二枚を渡される。

「ありがとうございますー！」

と席を立ち、ととととと出口に向かおうとした途中。

いきなり五人の男が走りこんできてサブマシンガン『ウージー』をぶっ放した。

バラバラバラバラバララララ！

「きゃーっ！」「うわーっ！」「や、やめてくれー！」

「テメエら全員手を上げろー！」

と怒鳴る銀行強盗犯。

それにしたがって全員が手を上げる。

「よし、全員その隅に集まれ。」

男Aは他の客、店員を誘導し始めた。

と、全員が集まったところで平賀に気付く。

「おい、そこのガキ！テメエもだ！」

「ガキじゃないのだ！武偵なのだ！」

と武偵手帳を掲げる平賀。

「……ぶっ、だからどうした？この人数相手にどうすると
言うんだ？」

「こっずするのだ！」

と近くの強盗の足元まで一瞬で移動し、股間を膝蹴り。

悶え屈むそいつの頭にハイキック。

男はボロ雑巾のように空を飛び、ドシヤと壁に激突。

壁に見事にデスフェイスを描きながらずると滑り落ちる。

男達はその光景に啞然としていた。

だが、いち早く正気に戻った男が平賀に銃を向ける。

「このクソがきいいいいいい！」

そして発砲。

バラバラバラバラ！とフルオートで9mmパラベラム弾が弾幕と

して吐き出される。

だが、それを平賀は、

「のだだだだだだだだだ！」

残像を残すほどのスピードで左右にすべるように避ける。

「な、なに！」

「今度はこっちの番なのだ！」

平賀は袖口からいきなりスローイングナイフを左右両方の手に二本づつ指で挟むように取り出し、

「喰らえなのだ！」

それを四肢めがけて投擲する。

「うおっ！」

だが強盗犯の男はそれを身を捻るようにかわす。

いや、かわすように見えて実は頬をかすって血が出ていた。

「ちっ、このガキ思ったよりやり、……や……が……」

ドサッ

突然倒れた男に他の仲間はまたもや啞然。いや、むしろ驚愕した。

「だ、大丈夫か！起きろ、何があつた！」

「無駄なのだ！このナイフには剛気君特製の神経麻痺毒がたっぷり塗つてあるのだ！しかも即効性で、効果が長い、お得な一品なのだ！」

恐ろしい事を笑顔で言う平賀。

男達はその台詞とそれを喜々として言う表情に恐怖を感じた。

そして恐怖はパニックとなつて発言する。

「くくく、うああああああ！」

男達はいつせいに銃を平賀に向け、撃ち始める。

ズダダダダダダダダダダダダダダダダ！

「無駄なのだ！」

平賀はそう言い放ち、くるりとUターン。

そして壁に向かって猛ダツシユ。

たどり着く直前に右足で壁を蹴る。

そして逆の足でまた蹴る。

それを繰り返すことでいきなり壁を走り始めた平賀。

弾丸はむなしく空を切るだけだった。

「くそ、なんであたらねえんだ！」

「嘘だろ！壁を走ってやがる！」

「ち、畜生！なんなんだあのガキは！」

さらにパニックに陥る強盗達。

彼らにとって悪夢は始まったばかりだった。

ガキン！ガキン！ガキン！

と銃が弾切れを起こす。

すかさずその隙にナイフを投擲する平賀。

それは一直線に銃口に滑り込んだ。

暴発を恐れた男達はそれらを捨てる。

ウージーが床に落ちた瞬間、平賀は跳躍。

弾丸のようにとび、男達を中心に着地。

一瞬にしてナイフを防弾ジャケットの隙間に滑り込ますように投げる。

一人目はわき腹に。

二人目は肩口に。

三人目は足首に。

それぞれの場所に喰らったナイフの毒は即座に体中に回った。

どさどさどさ、と崩れ落ちる強盗。

「これで、一件落着なのだ！」

そのど真ん中でガッツポーズを決める幼女。

そして拍手が沸き起こる。

それを受けた少女はと言うと、

「あ、さっさとあのくまさんを買っていくのだ！」

とどこかへダッシュして行った。

これが一時期武偵高の裏掲示板を騒がせた噂の真相だった。(実名は出ていないが)

この事件の呼称は『弾丸少女事件』と言われていたらしい。

ちなみに後日談だが、

「ふかふかなのだ」

と昼寝を決行する少女が装備科で確認されたそうなの。

閑話 平賀『GENE』文（後書き）

ちなみにわかりづらいかと思うので一応説明させてもらいますと、この平賀はメタルギ ポータブルオプスのGENEを元に作り上げた平賀です。

アイデアはOcelotさんからいただきました。

九話 旅行（前書き）

スランプです。

駄文です。

読まなくてもよかった影響はありません。

次回から原作入ります。

原作は行ってらだいぶましになると思います。

九話 旅行

やあ、武藤剛気だ。

今俺はホンダのMDXと言う車に乗って高速を走っている。

何でかって？ほら、俺とキンジが喧嘩するはめになった旅行のためだよ。

キンジと割り勘だったけど痛い出費だったね、嘘だけど。

実はあまり報酬をもらっても使わない所為かすごい額が並んでいた。

具体的に言うと0が9個並んでいた。

そんなわけで長野の山奥に春休み使って旅行に行こう！

となつて、いまホテルに向かっていると云う事だ。

メンバーは俺、美咲、亮、キンジ、蘭豹、綴となっている。

蘭豹と綴は俺らが予定立てていたところをかぎつけた蘭豹が、「生徒の都外の旅行は引率が必要だよなー？」と暴論を振りかざし、友人の綴もそれに便乗したと云うわけだ。

別に嫌ではないが。

「盗んだバイクでジャカッ」

いや、これ歌だから。実際盗まないから。だからみんな銃向けるのやめて」

「くだよねー。剛くんそんな不良じゃないもんねー」

「と言ってるけど、一番銃向けるの速かったの美咲ちゃんだよな？」

「う、……………」

と言つことがあったり、

「剛気！もっとスピード出そうぜ！婆みみたいな運転もう飽きた！」

「そつだぞ剛気。もっと早くしないとぉー、あたしが辛抱できなくて暴れちゃうぞー」

「ちょっと待てそこの先公共！武偵高の教師が法律破れとほざいて如何する！」

「だって、なあ？」

「つまらないんだぞー、車の中つて。もっとスリリングな事ないのかよーお？」

「だあつ！キンジ、そいつらの相手してろ！絶対に暴れさすなよ！」

「俺に振るかそこで！？お前がやれよ！俺じゃムリだつちゅーの！」

「俺は運転中だろうが馬鹿野郎！」

とそしたらなにやら後ろから隊列を組んだ外車が五台来た。

「……………、蘭豹先生。後ろのやつらってお友達ですか？」

「はぁ？うしろお？」

と蘭豹は体をひねって後ろを向く。

それと同時に五台の車からサブマシンガンをもった黒尽くめが身体を乗り出してこっちに銃を向けてきた。

そして発砲。

バラバラバラバラ！

チチチチチユイン！

弾は車に当たると跳弾して行った。

「強化防弾車選んでおいてよかったな」

「あー、剛ちゃん？」

「なんですか、蘭豹先生？」

「ありや、たぶんうちのつぶした麻薬密輸団の生き残りだと思う……」

「はぁ、そう言うのは徹底的につぶしてください、よ」と

般若の表情で怒り狂う蘭豹。

その間に美咲がファイブセブンを抜き、パンパンパンパン!

タイヤめがけて発砲。

5.7mm×28弾が前輪右のタイヤを撃ち抜き、車はコントロールを失いクラッシュ。

「一丁あがりい!」

「ナイス!美咲」

他のやつらはそれを啞然とした表情で見る。

「「「「すごっつ・・・」」」」

ということがあったり。

ちなみにあの黒服たちは特殊武偵(金一さんのような特命武偵の事)につかまったらしい。

さて、旅行である。

それに冬に旅行に來ると言えば、

「スキーリゾートじゃんよーお」

「さすがごーちゃん、良いセンスしてるなっ!」

「スキーするのは久しぶりだね、キンジ君」

「そうだな、二年ぶりか？あときは金一兄さんがつれてっくれたからなあ」

「早く早く！待ち切れないんだよ、温泉が！」

「おめえーら人に荷物もたせといてその態度はなんだ……」

そう、俺、武藤剛気はいま、絶賛パシられ中なのである。

「だって、剛くんそんなに荷物持ってもけるってしてるんだもん」

「そうだよ剛気君。それに人の役に立ってるんだから胸はって誇らないと」

「自主的ならわかるが、これはお前らが強制的にやらせたものだろうが！」

そんなこんなで旅館にて。

「さて、さつさと着替えてスキーしに行くぞ」

「そうだね！」

「じゃあ、女子と男子に分かれて行くこうか。女子は時間かかりそうだから」

「「「「「了解」」」」」

男子陣はぱつぱと着替え、ゲレンデへ直行。

「俺が最強だぁー！」

「負けないよ、剛気君！」

「まてえーおまえらぁ！」

そしてつき次第レースを敢行。

「俺は風になるうー！ー！」

「まだだ、まだスピードが足りない！」

「亮がキャラ崩壊してるっ！」

ぐだぐだである。

一方、女性陣は。

「剛くんのケーキ、剛くんのケーキ、剛くんのケーキ、剛くんのケーキ、剛くんのケーキ」

「甘いもの賭けられちゃア、負けられないねえ」

「そうだなあ、でもケーキはあ、あたしんだよお」

こちらもレースになったみたいだ。

「ほざけえー！ー！」

「剛くんのケーキは渡さない！」

「負けるわけには行かないんだよねーえ」

「こちらもぐだぐだである。」

結果、精魂疲れ果て、懐石料理をがつつき、爆睡。

それが三日とも続く事となった。

そして帰り道。

「つかれたあ」

「うだあー」

「もうダメだ、食えん」

「すぴー」

「剛気君、ガムどうだい？」

「ああ、ありがと」

死屍累々と化していた。

それが俺ら、春休みにやったイベントである。

九話 旅行（後書き）

かゆ・・・・・・・・つま・・・・・・・・

ドサッ

チーン・・・・・・・・

十話 チャリジャック（前書き）

原作にやっと入りました。

今回は調子が良いです。

ちなみに設定の話編集して、他のキャラの事もいれて見ました。
ぜひみてください。

十話 チャリジャック

一年生から進級し、春休みにスキー旅行に言った後、ゲーセンなどに入り浸った生活を送っていた武藤剛気だ。

昨日はスカイラインを整備・点検して寝た。

そう言うわけで少し寝不足気味である。

「剛気君、起きなよ。もうそろそろ起きないと遅刻する歯目になるよ」

「まじか、もうそんな時間かー」

と言うわけで起きて、洗面台で顔を洗い、寝癖を直し、リビングへ向かう。

「剛くん今日も遅いね、起きるの」

「うるへー、昨日はスカイライン点検してたら改造したくなって、その衝動押さえきれなくて夜遅くまで起きてたんだよ」

「まあ、それは良いとして朝ご飯できたよ二人とも」

「いつもありがとな、亮」

そう、なぜか車輻科である俺と強襲科である亮と一緒に部屋なのだ。

ちなみに美咲は朝飯をたかりに来ただけである。

「いつも美味しいね、朝からこれだったらやる気が出るでしょ」

「そうだと良いんだけど、目の前にいつもこれと同じようなもの食べて、それでもなお気だるげな人がいるんだよね」

「ん？そんなもん、慣れだよ」

「慣れるな」

最近、子分の俺に対する扱いが酷いのです。

「そろそろ出れば、途中でキンジ君と合流できると思うよ」

「そうか、ならさっさと行くとするか」

「じゃあ、確認。ハンカチ持った？」

「もった（よ）」

「ティッシュは？」

「持った」

「あるよ」

「武偵手帳は？」

「あるな」

「持ってるよ」

「拳銃」

「ここにある」

「僕も」

「ナイフ」

「袖に入ってる」

「ちゃんと持ってるよ」

「バッグは？」

「あるよ」

「わりい、忘れてた」

とバッグを取って、

「さて、行くか」

「………だが、まさかあんな事になると思わなかった。」

数十分後。

「減速したら爆発しやがります。後ろのお前らも2メートル範囲から離れると爆発しやがります」

「キンジイー！テメエ俺を巻き込んでんじゃねえぞ！」

「うるせえ！俺だつてなりたくてこんな状況になつたんじゃねえ！」

「チャリジャックかあ、珍しいね、美咲ちゃん」

「そうだね、それに遭遇した上に巻き込まれるなんて天文学的な確立だろうね、亮くん」

「ほらみる！もう、亮たち遠い目をして現実逃避してるじゃねえか
！」

「俺だつてしてえよ！」

「うるせえでありやがります。するならとつととしやがれでありや
がります」

「「^{元凶}テメエが言うなあああああ！」」

何故こうなつたか。

それは数十分前の出来事だつた。

シャー——

軽快にチャリを走らせ、武偵高第一グラウンド前を曲がり、キンジを探しているときだった。

ウオオオオオオオ!

「ねえ、何か聞こえない?」

「そうだね、誰かの叫び声みたいだ」

「だれか、と言うよりキンジだろうな」

と俺らは後ろを見た。

そして、目が合った。

「剛気?マジかよっ!」

と目を合わせた途端、いきなり方向転換し、学校とは逆方向、女子寮の方に向かうキンジ。

「………犯罪者発見。追跡する」

「そつだよね、あつち女子寮しかないし」

「キンジ君、これが非行と言つやつかい？」

俺らは猛スピードでキンジを追いかける。

「キンジィ！そこになおれえ！轢いてやらあ！」

「剛気っ！何で追いかけてきやがった！」

「キンジ君。君このまま突っ走つてに女子寮行つたとして、どうするの？」

「は？って違う！このチャリには爆弾がしかけてあるんだよ！」

「キンジくん、うそはもうちょっと信憑性のあるものを言わないと……」

「嘘じゃない！俺の右をみて見やがれ！」

と俺らはキンジの右隣を走行している物体に目を向けた。

その物体とは、セグウェイに、銃座とUZIをつけたなんと物騒なものだった。

しかも、目（銃口を目と称させてもらうが）が合った。

「このチャリには爆弾が仕掛けてありやがります。減速すると爆発しやがります。そこのお前らも2メートル以上離れると、こいつのケツが木っ端微塵になりやがります」

「なんか要求増えてるっ！」

「剛くん！キンジくんのサドルに四角い物体がついてるよ！」

本当みたいである。

そして巻き込まれたみたいである。

と言っわけでさっきの場面に戻る。

「どうすんだよキンジ！」

「まずは人気の無い所に進むしかないだろうが！」

「じゃあ、そこを右に曲がれ！第一女子寮の方から第二グラウンドに直行するぞ！」

と右に曲がり、ふと上を見た。

ちょうどツインテールの女子が飛び降りるところだった。

「「「「はあ？」「」「」

飛び降りた少女は背中からパラグライダーを背中から生やし、こっちに滑空して来た。

「ほらそのバカ達！とつとと頭を下げる！」

と二丁の銃を出しながら言うので反射的に頭を下げる。

バリバリバリバリ！

問答無用にセグウェイをぶっ放した。

「チツ！数が多すぎるわよあんた達！」

「あれ？アリアちゃん？」

「美咲！？あんたそこでなにやってるのよ！？」

あの少女はアリアと言っらしい。

「え〜と、仲良く登校？」

「仲良く爆殺の方があってると思うよ、美咲ちゃん」

とか何とか言ってるが俺はこれぽっちも死ぬ事を考えてない。

まあ、後ろの二人もそうだろうが。

「オイ其処のチビ！」

「チビ言っなっ！まだまだこれからなのよ！」

「どうでも良い！さっさとこいつをどうにかしてくれ！俺ら三人は自分達で何とかする！」

とキンジを指す。

「・・・・・・・・ちゃんときるんでしょうね！」

「武偵憲章1条！『仲間を信じ、仲間を助けよ』だろ？」

「わかったわ、そのポケナス！いくわよ！」

よし、これでキンジの方は片付いた。

「亮、美咲、キンジが救出された瞬間に思いっきり加速して右に突っ走るぞ」

「了解」

「わかった」

そしてキンジがアリアに引っ張りあげられた瞬間、

「オラアアアアア」

「・・・・・・・・！！」

「よいしょー！」

一気に40キロぐらいまで加速し、右へ離脱する。

ドコオオオオオオオオン！

背後で爆発する音がして熱風が背中をなでる。

「ふう、一件落着か？」

「アリアちゃん達がどうなのかわからないけど」

「行って見た方がよさそうだね」

「だったらあつちの体育倉庫に突っ込んだみただぜ」

それで俺らはいったんチャリを降り、吹き飛ばされた体育倉庫の門をくぐり、倉庫の隅の跳び箱に仲良く突っ込んでいるキンジたちを発見した。

「無事かーキンジ？」

「……………へ……………へ……………」

「ん？」

「ヘンタイー！ー！」

「チビは無事、と」

「さ、さささっ、サイッテー！」

そしたらいきなりチビはぼかぼかとキンジを叩き始めた。

「お、おいっ、や、やめろっ！」

「このチカン！恩知らず！人でなし！」

ポコポコポコポコ！

「ち、違う！こ、これは、俺が、やったんじゃ、な　！」

「おい、おまえら。無視スンなや」

「え？つて、伏せて！」

そう言われた瞬間、後ろから、バババババババ！とマシンガンのシヤワーが飛んできた。

それによりほこりが舞い、視界が劣悪になる。

「あんた達！大丈夫！？」

「げほっ、げほっ、ああ、無事だ。ほこりが気管に入っただけだ」

「私も大丈夫！」

「僕もだよ」

ほこりが晴れ、無傷の俺達が顔を出す。

「あんた達、どうやって……………？」

「ふっ……………剛気たちを傷つけるには戦車群を持ってこないと無理さ」

と、キンジがチビをお姫様抱っこして跳び箱から出てくる。

その目は鋭く、さっきとは雰囲気違った。

「へ？え？」

「強い子だ。ご褒美だよ、お嬢さん」

と気障な台詞を言い、マットの上に降ろす。

バリバリバリバリ！

ヒウンヒウンヒウンヒウン

という音をBGMに俺とキンジは向かい合う。

「助太刀は必要か？」

「ああ、とびっきりのを見せてやるっ」

そして俺らは歩き出す。

体育倉庫の扉の真正面へ。

視界の端では亮が曲絃系を操って、全ての弾を斬りおとしている。

俺はハードボラーを二丁。

キンジはブレッタを一丁。

敵のセグウェイは16台。

かなり多い。

「手っ取り早く銃口狙って壊すぞ」

「了解した」

そしていったん銃声がやんだ。

その瞬間、

バリバリバリバリバリバリバリバリバリバリバリバリバリバリバリバリ！

三丁の銃が火を吹いた。

それから発射された弾は全てUZIの銃口に滑り込んで行き、暴発させる。

バババババババババババババババババアーン！

「亮、お疲れ」

「いや、これぐらいだったらまだ大丈夫さ」

「剛くん、新学年そうそうサボりだね」

「別に良いだろ、卒業できる分の単位はあるんだし」

とそこでこつちを唾然とした表情で見ているチビを発見。

俺はそいつの目の前に歩み寄り、見下ろす。

「俺は車輛科の武藤剛気だ、お前は？」

と聞いたら、そいつは小声で

「『暴走列車』……」とつぶやいた。

「……そうだ、俺がその『暴走列車』だ、で？お前の名前は？」

そうしたら何か玩具を見つけた子供のような表情になり、

「あたしは神崎・H・アリアよ、アリアでいいわ」

と言った。

「じゃあ、僕も紹介させてもらおうか、僕は強襲科の不知火亮。よく『鬼蜘蛛』って呼ばれてるよ」

「俺の番か。俺は同じく強襲科の遠山キンジ。『仮面舞踏会』と呼ばれている。以後お見知りおきを、お嬢さん」

「知ってると思うけど、一応流れるに言わせてもらうね？私は中空知美咲。通信科だよ。よく『緊急停止装置』って呼ばれてるね。なんか物扱いされてあまり好きじゃないんだけど、このグループのストッパーやってます」

全員が自己紹介を終えたら、アリアは立ち上がり、おもむろにうるうる歩き始めた。

「これなら……最強……ママも……」
とぶつぶつ呟きながら。

「……おい、アイツ、いつもこうなのか？」

「ううん、こんなに考え込んでる所ははじめて見たかも」

と話していると、

アリアは唐突に顔を上げ、こっちを向き、

「決めたわ。あんた達、あたしのドレイになりなさい！」

と言い放った。

は？

十話 チャリジャック(後書き)

眠い…………。

おやすみなさい…………ZZZ。

十一話 契約（前書き）

難産でした。

バスジャックまでいけるかなーと期待してたら、その直前で力つき
ました。

次は絶対に出します。

十一話 契約

……嘘だろ……。

それが俺ら男子陣の内心だった。

こんなちっこい子がドSだなんて！

奴隷になれ？しかもあんた達？

どんだけハードなプレイをするつもりなんだ！？

もうこれはダメだろって言うほどの妄想を繰り広げている俺らを尻目に、

美咲はアリアのそばに歩いて行き、

「美咲、こいつら、あたしの事無視するんだけど!？」

「アリアちゃん……。」

と美咲はおもむろに手刀を振りかぶり、

「ぐすっ」「みぎゅっ」

思いっきり振り下ろした。

「……!な、なにすんのよ、美咲!」

もうそのときの美咲のオーラはやばかった。アレならまだ餓死寸前の擻猛なトラにプラスチックのスプーンで退治した方がマシだと思えるほどだった。

その後美咲がなにやったかは、すばやく相手のナイフを人差し指と親指で挟んで押し折り、金的蹴りで無力化。

小学生を解放した後、命乞いする犯人に向かってクラドのくまの着ぐるみのキック魔の如く蹴りのラッシュ。

犯人は全治半年の重傷で警察病院へ搬送。

俺らは口裏合わせて正当防衛を主張した。ついでにその犯人はPTSDで話しすらまともに来れなかつたらしいから俺らはお咎めなし。ということがあった。

まあ、それよりはだいぶマシという事を言いたかったのだが。

ちなみにアリアは今もなおチップの洗礼を浴びている。

「ごめ、『ごすっ』んなさ、『ごすっ』い！もう、『ごすっ』な
いか、『ごすっ』らっ！」

「美咲、そろそろゆるしてやれ。さすがに可哀相だ」

「んー、わかった。まだ足りない様な気がするけど、剛くんがそう
いっなら」

とこっちに小走りで駆け寄ってくる。

アリアは痛みに悶えて床をぐるぐると転がっている。

「うー………」

「アリア、そろそろしゃんとしてくれ。まともな話が出来ないだろう」

自分の親友がやったのにとてつもない暴論である。

「まだ頭が……、で、なによ。何か文句でもあるの?」

「あるかと言われればたんまりあるというしかないんだが、まずどうしてそうなったかを聞こうか」

「私はある事のために人手が必要な。それで今日、とてつもない能力を持つあんた達に白羽の矢が立ったってわけ。だから、黙ってあたしのドレイになりになりなさい!」

こいつも俺と劣らないほどの暴論の持ち主だった。

「ふう、あの『剛気君。そろそろ教室に行かないと今度はホームルームをサボる事になるよ?』え?もうそんな時間?仕方ねえな、アリア、この事は放課後ケリつけるぞ」

「そういつて逃げるつもりでしょ!そうはさせないわよ!」

と俺に飛び掛ってくる。

俺はそれをすばやく右後ろに一步下がリアリアの後ろに回る。

そして猫を掴む様にセーラー服の襟を掴み、肩に担ぐ。

「は〜な〜せ〜！」

何か叫んでるけど無視。

肩になんか小太刀っぽい物が当たって痛いけどそれも無視。

「キンジ、外に俺のチャリがあるからそれに乗れ。俺は走って追いかける」

「わかった」

「お前らもとつと行くぞ。始業式サボってホームルームも、つてのは蘭豹に睨まれちまうからな」

「わかった〜」

「了解」

「あんたバカ？自転車に人間の足じゃ追いつけないでしょうが！」

「ムリかどうかは実際試してからだな」

とキンジたちがチャリに乗ったのを確認してスタンディングスタートの構えを取る。

そしてキンジたちが全力で漕ぎ始めたのを見て、一気に加速。

時速40kmぐらいでキープ。

肩に乗ってる荷物（笑）は「きゃああああああああああああああああああ！」と絶叫している。

キンジたちも俺の速度に合わせ、走行している。

校門前に着き、キンジたちはチャリ置き場へ。

俺はアリアを担ぎ、教務科に直行。

目を回しているアリアをちょうどでてくるところだった高天原　ゆとり先生に投げ渡す。

「目を回してるだけで他にたいした外傷とかはないからよろしく」と背中を向けながら言っておいて。

そして階段に戻り、下からダッシュで上がってきた亮たちと合流。

クラス分けでは全員同じクラスになったらしい。

そして2年A組の教室に到着。黒板に貼ってあった席順にしたがつて座る。

比較的後ろの方で、席は近かった。

待つこと数十分。

担任だったらしい高天原先生が復活したアリアを連れ、そのアリア

が俺らの一人の近くを希望すると言っイベント発生。

「先生、私あいつらの近くが良い」

「へ？じゃ、じゃあ中空知さんの後ろが開いてるからそこで良い？」

「わかったわ」

と俺の右後ろにいる美咲の後ろの席に向かう途中、俺の席の隣で立ち止まり、

「あたし、あんた達をドレイにするのは諦めて無いから」

と言ってきた。

それを耳ざとく聞きつけていた峰理子が、

「ん？んん？ごーくんもしかして盛大なフラグ？しかも複数？」

「お前が考えてることは絶対に違うからな」

「そうやって否定するところがあやしいねえ。んー、あ！理子わかつちやった！これって逆ハ！ってやつなんだね！しかも美咲ちゃんがいるのに新たな女の影！修羅場だね！修羅場なんだね！？」

意味わからん。

事実無根の話しに終止符を打とうと文句を言おうと思ったとき、

ずぎゅぎゅん！

アリアが壁に向かって発砲した。

「修羅場とか、逆ハーとかくっだらない！」

「恋愛なんて、時間の無駄よ！なんか文句あるなら、言いなさい！
風穴開けてやるわ！」

と言っのけた。

そしてシーンと静まる教室。

教師もシーンとしていた。

それはチャイムが鳴るまで続いた。

時は過ぎ、放課後。

昼休みはアリアが教務科へ俺らの資料を漁りに行くと言っことがあり、遭遇せず。

アリアの机に『第三男子寮504号室にいる』と言っメモを残して
キンジの寮部屋へ向かった。

そしてキンジの寮部屋にて。

トントントントントン

ジャア

ジャツジャツ

ジュワアッ

俺と美咲が料理をしていた。

俺らの場合、寮が違うキンジは抜かせてもらうが、朝は亮が作り、昼は各自で、夜はキンジの部屋に集まり、俺と美咲が料理するとうことになっている。

故に俺らは五人分の料理を作っている。

そして作っている途中に、ピンポンとチャイムが鳴る。

「キンジ、出てくれ。たぶんアリアだと思うから」

「わかった」

とキンジが玄関に向かう。

がちゃっ

『遅いつ、ベル鳴らしたらカンマ5秒で出なさい!』

『無茶言つな、俺は剛気じゃないんだ』

『まあ、いいわ。……………いい匂いね。何か作ってるの?』

『今日の夕飯だ、あがってくれ、今日はお前はゲストらしい』

『じゃあ、その荷物お願い』

と、ととと、とリビングに小走りで来るアリア。

「剛気！朝の決着つけに来たわよ！」

対する俺は盛り付けを終え、料理を机に置くところだった。

「その前に腹ごしらえといこう。ほら、お前も座れ。美咲が大奮発した料理だぞ」

「ん………、わかつたわ」

と席に着くアリア。

そしてキンジが荷物をリビングの隅にしまい、席に着き、俺と美咲も調理道具の片付けを終え席に着く。

そして全員で『いただきます』と号令し、

黙々と食す。

途中でアリアが涙ぐんでいたが無視。

そして食後。

エスプレッソメーカー（商店街で俺が当てた）でエスプレッソを淹れ、全員に配る。

のんびりと飲みつつ、アリアの話聞くことに。

「あたしは、とある犯罪者の組織を追ってるの。あたしはそいつらに返さなきゃいけない仇がある。でも、一人じゃ無理。でも、仲間を増やそうにもイギリスではあたしに着いてこれるやつがいなかった。だからあたしはあたしに着いて来れるような人を探してここに来た」

「それで俺らが目になつたと言うわけか」

「そう、SランクとAランクの上位者のグループを形成してるあんた達ならあたしの足を引つ張らず、ついてこれると思ったから」

「それで？ドレイってのはどういう事なんだい？」

「アレはあたしがあんた達が対等に仕事できるような能力を持ってないから言ったのよ。ほら、主人の方が強いから着いていけるって思えるように」

「それはMのやつらにしか効果がないよな……」

「うるさいわよキンジ。それはともかく、あたしはあんた達に協力を頼みたいの。ダメかしら？」

キンジたちが俺の方へ向く。

「なんだお前ら？俺の方見て？」

「いや、剛くんが決めて？って思ったから」

「同じく」

「俺も」

こいつら自分で決めると言う事はしないのか。

「……………美咲、お前から見てどうだ？信用できそうか？」

「うん、大丈夫だと思うよ」

「そうか……………。よし、わかった。協力しよう。ついでだ、携帯のアドレスも交換しておこう。必要なときは呼んでくれ」

といたらばあっと目が輝くぐらいに開き、それはもうはしゃぐぐらいの喜びようだったみたいだ。

そうして俺らがアドレス交換を終えた後、アリアはとんでもない爆弾を投下した。

「あ、そうだ。あたし、しばらくここに泊まるから」

……………

「」「」「ゆっくり」「」

「待てお前ら！何でだよ！」

「だってあんた達の一人と一緒にいた方が何かと都合が良いじゃない？」

「じゃあ、何でここなんだ！」

「空き部屋があるのここだけなんだもん」

「ぐう……………」

そこで俺は助け舟を出すことにした。(他人事だから)

「キンジ、今日は泊めてやれ、もう外は暗いから」

「わかったよ……………」

「じゃあなキンジ、また明日」

キンジはそれに力無く手を振る事で答えた。

そうして、俺らの波乱万丈の生活が幕を開けた。

十一話 契約（後書き）

次回からアクション要素をだして行きたいと思います。
これからも頑張るんでよろしくお願いします。
感想も出来たらお願いします。

十二話 初依頼（前書き）

今回はキンジメインです。

いや、キンジナレーターかな？

すみません、バスジャックは次回に回させて頂きます。

十二話 初依頼

俺、遠山キンジの朝はこれと言って早い訳ではない。

しかし時には例外と言うものが存在する。

たとえば、剛気がピッキングして侵入してきて耳元でファンファーレ鳴らされたり。

剛気がドアを爆破して突入してきたり。

気付いたら亮が添い寝してたり。

美咲に踵落としされそうになったり。(これはシャレにならなかつた。ベッドが直角に曲がるってどうやったんだ?)

色々と例外が存在するが、今日は一味違った。

俺が朝の惰眠をむさぼってたら、むぎゅ、と顔を踏まれた。

それも地団駄を顔の上でやられたかのように何度も。

強制的に起こされ、半目を開けてみて見ると、

「お・な・か・す・い・た・〜!!」

腹をすかせた子トラがいた。

顔を踏んでいるのはこいつらしい。

俺は横に転がりベッドから転がり出る。

「朝っぱらから何しやがる」

「おなかすいたのよ！何か無いの？」

「ない」

「何か出しなさいよ！」

……こいつは言葉の大事さがわからないらしい。せめて言葉のキャッチボールを試すぐらいの事はして欲しかった。

「わかった、すぐに出すから待ってる」

「あるんじゃない！だったらさっさと出しなさいよね！」

俺はその言葉をスルーしつつ、湯を用意する。

そして例のブツを戸棚から出し、タイマーを3分にセットし、ふたを開け、沸騰し始めた湯を流し込み、ふたを閉め、まだそこが熱いやかんでまた接着させ、タイマーをスタートする。

もうさすがにわかっただろ？そう、カップラーメンだ。

夜にあんな豪華なもの食つてると他の料理が味気なく感じてしまうため、朝は超チープな物を食べて、味覚を元に戻すと言う作業をこめていつもインスタント品にしてある。

ちなみにさっきの会話を翻訳させてもらおう。

「朝っぱらから何しやがる」

「おなかすいたのよ！何か無いの？」

「（まともな物は）ない」

「何か出しなさいよ！」

「わかった、（まともな物じゃなくて良いなら）すぐに出すから待ってる」

「あるんじゃない！だったらさっさと出しなさいよね！」

と言っわけである。

どん、とアリアの前にカップラーメンを置く。

俺はさっさと昨日かって来た惣菜のポテトサラダパンをぱくつく。

「ねえ、これ、なに？」

「みてわからないのか？カップラーメンだよ」

「わかるわよそれくらい！そうじゃなくて私の前になんでこれが置いてあるのよ！」

「は？それこそお前の朝飯以外に無いだろ」

「え？じゃあ、オムレツは？サンドウィッチは？」

「・・・・・・・・何を期待してたか知らんが、一つ言っけて置いてやる」

「な、何よ」

「俺はあのメンバーの中で、唯一料理が出来ないんだ」

「・・・・・・・・」

「それにだ、これは俺の親切心なんだよ」

「これが？どうやったら親切心になるのよ！」

「昨日、剛気たちの料理を食べただろ？」

「ええ、食べたわよ」

「それでだ、朝になんか安っぱい何か食っておかないと、他の食堂とかの料理が泥水の如く感じるんだよ。それこそ食べた物じゃない
ほど」

「そつなの？」

「ああ、俺がその生き証人だ。前、朝昼夜三食とも全部あいつらの料理食ってたらファミレスの料理がクソまずかった」

「わかったわ、飯にそうだとしましょう。ねえ、それでもこれよりはマシなもの無いの？」

「時間的な意味考えたらそれが一番だ」

時計は7時30分を指していた。

そしてちょうどタイマーが鳴る。

「ほら、さっさと食って学校行くぞ」

「………わかったわよ」

文句たらたらな顔しつつも食べるアリア。

俺はその間に制服を着る事にした。

ハンガーに掛けてあった防弾制服を着て、脇のホルスターにベレッタを入れる。

ダイニングに戻ると、アリアがちょうど食い終わったところだった。

「ほんとに安っぽい味ね、これ」

「そういうもんだからな」

そうしていつもどおりにチャリに………と思ったが昨日爆破されたので、バスで行く事にした。

もう一つ理由を言わせてもらうと、チャリで行ったらアリアに風穴を開けられそうだったんだ。

7時58分のバスに乗り、武偵高へ向かう。

アリアはごった返すバスの中、背が低いからまともな酸素が吸えず、苦しそうにしてた。

仕方ないから少し空気を吸えるようにバッグでスペースをとってやる。

それが二十分くらい続き、武偵高校門前で降り、教室へ向かう。

「おはよう、剛気」

「おー、キンジおはよう」

「おはよーキンジくん」

「おはよう、キンジくん」

「亮も美咲もおはよう」

「お、アリア、おはようさん」

「おはよう。早速今日から頼むわよ?」

「今日から?早いね」

「早い方が良いもの」

と挨拶をかわし、席に着く。(その後アリアも他のやつらと挨拶してた)

そしてキングクリムゾン。時は放課後へ飛ぶ。

俺らは今、強襲科のロビーで装備の確認をしている。

剛気はハードボラーを。

美咲はファイブセブンを。

亮は鋼糸用の皮手袋とMK・23を。

アリアはガバメントを。

俺はベレッタを。

それぞれ簡易分解フィールドストリップしていた。

「で？今日の依頼はなんだ？」

「世田谷方面でのパトロールよ」

「？やけにレベルが低いな」

「そう聞こえるけど実際あそこらへんで武装集団が蜂起したらしいのよ」

「物騒な世の中だな」

「だけど実際蜂起したかは警察もわかって無いらしいよ」

と美咲がノーパソを見せてくる。

そこには『武装蜂起の可能性あり。しかし実際被害はまだ判明して無い。』と書いてあった。

「被害が無いなら冤罪で済まされるかも知れんぞ。そこんところはどうなんだ？」

「問題ないわ。やつら、イギリスでテロ行為を行った前科があるから」

「……………初耳なんですけど。」

「だったらなおさら警察が動くじゃねえか。俺らが行く必要ってあるの？」

「日本の警察は動かない、いえ、動けないわ。バックにいる組織の報復が怖くて」

アリアはキンジたちがイ・ウーの事を知っている事を知りません。

「そうだとしたら俺らも動いたらやばいじゃないか」

「違うわ、この依頼を受けたのはイギリス武偵高から転校してきた私が受けたの。だから、あいつらが報復したとしてもイギリスに行くわ。百歩譲って日本に報復したとしても、また叩けばいいのよ」

そう簡単に行くのだろうか。

「ああ、もう！つべこべ言っていないでさっさと準備する！出来たら

即行で行って即行で帰ってくるわよ!」

そうして俺らは剛気の運転するSUVに乗って世田谷方面に向かった。

「やつらはこの辺りにアジトを作ってるらしいわ。手分けして探すわよ」

「ここって住宅街のど真ん中だよね?これは銃は使わない方がいいかも」

さすがに周りの住民に被害出すわけにも行かないしなあ。

めんどくさいところにアジト作りやがって。

「おい、キンジ。お前は美咲と一緒に待機してる。美咲、お前は管制。亮、アリア、俺でアジト探した」

「了解」

「待ちなさいよ!全員出て風潰しに探したほうが早いわ。」

「保険を残しといた方が万が一の状況に対応しやすい。それに風潰しに探さなくとも半径20キロメートルは一気に探索できるから必要ない」

確かに亮と剛気がいれば普通に搜索するより早い。

あゝ、俺も曲絃系習っておくべきかなあ。

最近美咲も練習してるみたいだし。

せめて5本は操れるようにしておきたい。

約十分後……

「いたぞ。ずいぶんと真つ当な建物に住んでいるんだな」

と、車に乗る剛気。

「本当に見つかったんでしょね？」

「ああ、少し手間取ったが見つけたぞ」

そういつてる間に全員車に乗り終えた。

アリアは助手席に飛び乗り、不機嫌な顔をしていた。

そこから大体600メートルぐらい離れたところにそれはあった。

こじんまりとしているが、立派に人が住めそうな家。

ただし、よくみれば、窓の奥にいろんな意味でヤバげなおっさん達がいる事が伺える。

「よし、まずは俺とアリアで突撃する。それで逃げてこれたやつを亮が叩く。それでいいな？」

「「「「「了解「「「「」

そう言うや否や、剛気は正面入り口に忍び寄り、アリアに二、三個
ハンドサインで指示してから、

ゴシャアツ！「武偵だ！武器を下ろして手を上げる！」

扉を蹴破り突入して行った。

アリアもそれに続いて……………

「や、やめる！」

「助けてくれ！」

「うあ、あ、アアアアアア！」

「な、なんなんだお前らは！」

「う、撃て、ウテエエエエ！」

「俺の腕が、ウデガアアア、ブゲラツ！」

「頼む、何でもやるから見逃してくれ！え？それは話しがちが、ウ
ギヤアアアアア！」

効果音は検閲により削除されました。（手抜きじゃないよ、作者
の脳じゃこれしか極上の拷問音の表現は出来なかったのさ）

これじゃあどつちがテロリストだよって言いたくなる。

音がやみ、しばらくしたら剛気とアリアが出てきた。

剛気は頬に血の水滴が付着しており、目は鋭いながらも爛々と輝き、その両手のハードボラーもあいまって殺ってきた後にしか思えない。

対してアリアは借りてきた猫のように縮こまり、顔面蒼白で身体を小刻みに震わしていた。

……やっぱ一言突入する前に行っておくべきだったかな？

剛気、弾を使わないミッションだと銃を打撃武器に見立てて人の骨を押し折って無力化する事が多いって。

いまさらだが、俺らも最初の頃はアリアみたいに()()。:()。()
()()ガクガクブルブルってなってたんだよな。

「剛気君、お疲れ」

「ああ、少し物足りなかったが、よしとしよう。あ、スマンな亮。少しやりすぎて逃がすのを忘れてたぜ」

「いいよ、僕としては依頼が終わって万事オーケーって気分だからぶっっちゃけ働かずに金と単位もらえました状態だからな。」

もう卒業する分の単位は持つてるけど。

「剛気、これからどうする？予定より早く終わったからこのまま家に帰っても暇をもてあそぶだけだぜ？」

「ん、そうだな。久しぶりに晩飯寿司にするか。つーわけで仕入れに行くぞ」

お？寿司か、剛気って料理とかも出来るけど、一番うまいのは寿司なんだよな。

あいつ、なんか魚選んではずれた事一回も無いし。

コツを効いて見たら、『勘』って言われたし。そもそも俺料理しないだけだ。

俺らは、依頼完遂報告を済ませ、そのまま魚市場へ直行。

いろんな所をみて回り、剛気を選んで、俺の部屋で寿司パーティーをやった。

魚市場までエリアは何も喋らなかったが、好奇心が勝ったのか市場では剛気や美咲にいろいろと聞いていた。

ちなみに、寿司は絶品だったと言っておう。

十二話 初依頼（後書き）

テスト期間で更新が遅くなりました。
すみません。

明日からは更新速度をだんだんと戻します。
感想・ネタ・質問待ってます。

十三話 バスジャック（前書き）

バスジャック編です。

内容そこまで濃くありません。

これから努力して行きます。

十三話 バスジャック

おはよう、武藤剛気だ。

今日も今日とていつもどおりに学校へ行く一日が始まった。

いや、本当はそう願っていただけだったのかもしれない。

なぜなら、俺は今なぜか一時間目の真つ最中なはずの時間でお台場に向けてヘリを飛ばしている。

「剛気！もっとスピード出せないの!？」

「剛ちゃん、バスは300mさきで右に曲がったみたい!」

「剛気君、全員装備が完了したよ!」

「剛気！リペリングいつでもいけるぜ!」

「剛気さん、バスを視認しました」

どうしてこうなった……

それは今朝、朝飯を作り、亮と美咲に食わし、学校の準備をして駐車場のスカイラインに乗ろうとしたところだった。

信じてるものゝ強くひきよゝせる

いきなり携帯が鳴りだす。

番号はアリア。

「武藤だ。どうした？」

『剛気！今すぐ第三女子寮の屋上にヘリで来て！緊急事態よ！』

っーっーっー

「……………これは、新手のオレオレ詐欺と言っちゃつか？」

「うーん、その携帯、改造してボイスチェンジャーとか効かないようにしてあるんでしょ？だったら無いと思うな」

「それに、アリアちゃんが携帯をやすやす渡すとも思えないし」

「と、言っわけは事実と」

「そう言うことだね」

「はあ、どつ言っつてヘリを飛ばらつて来いっつて言うんだよ……………」

「剛気君、別にかっぱらつて来なくても君Sランクだから何機か所有してるでしょ？」

そう、車輛科のSランクはその遂行した依頼の数によるが、何機かヘリやボート、拳銃の果てには超高速航空機まで個人所有する事が

出来るのだ。

だがそれには一つ問題がある。

「考えてもみるよ、俺の改造ヘリを東京上空で飛ばしたらそれだけでもう戦争物だぞ?」

そう、実は調子に乗りすぎて平賀文と一緒にハインドを改造したらとてつもない代物になってしまったのである。

たとえば言うならF・22の装備をハインドに載せて、MIRVを追加搭載。

機関銃は徹鋼弾使用と言うもはやワンマンアーミーならぬワンヘリアーミーなヘリなのである。

「そんな事言ってアリアちゃんの命令蹴ったら風穴開けられるよ?」

「そうだよ、だからあきらめてい」?

と、言うわけで俺は車輜科のハインドに乗り女子寮屋上に向かった。

着いて美咲がドアを開けると、

「遅いわよ剛気!」

アリアが飛び乗ってきた。

「おい、剛気。なんだこのヘリは?どこかに戦争しに行くのか?」

キンジが続いて乗り。

「よろしくお願ひします剛気さん」

レキが最後に乗ってきた。

「で、何があつたんだ？へりは持ってこれたがいきなりだったから武装は少ないぞ」

「かまわないわ。バスジャックよ、第三男子寮前7時58分発のバスがノンストップ運転しているらしいのよ」

「そうか、で？」

「で？それ、どういう意味よ」

「いや、天下のエリア様が追いかけるにはなんか違和感があるんだよ。たかがバスジャック如きで」

「ああ、それは俺も気になった」

「………そうね、確かに程度は低いかもしれないわ。でもこの事件は武偵殺しが関わっているかも知れない。それだけでわたしにはじゅうぶんよ」

「『武偵殺し』を追ってるのか？」

「追ってる犯罪者のうちの一人よ」

「そうかい」

表情がこれ以上聞くなと言っ顔していたので話を切り上げる。

「よし、美咲は警察の無線につなげて情報収集。亮は武装の確認。キンジは降下時のリペリングの簡易整備しといてくれ」

「了解」「」

「アリア、お前は『武偵殺し』の情報をキンジと亮に教えてやってくれ。レキは狙撃の準備を。一応保険としてな」

「わかったわ。キンジ、亮、よく聞いておきなさい」

「わかりました」

そして武偵高方面にへりを飛ばす。

十分後、美咲が警察の無線から情報を引っ張り出した。

「剛くん、バスはお台場方面に向かって猛スピードで走行しているらしいよー！」

「了解！」

俺はへりを旋回させ、お台場方面にフルスロットルで直進する。

それで冒頭に戻る。

「よし、キンジ、アリア、亮、お前らバス内部、およびバスの底部の爆弾の搜索。レキはへり内に待機。美咲は情報を集め続ける。俺

は上空からの援護に回る」

「了解！」「了解！」「了解！」

俺はバスの真上にヘリを合わせ、

「GO！GO！GO！」

アリアたちを送り出す。

そしてバスの真後ろにヘリを追随させる。

しばらく追い回していると、

「剛気さん、なにやら不審な走行をしているスポーツカーが後ろから来ています」

とレキに言われ、確かめてみるとUZI銃座のついた車を発見。

急遽無線を開き、キンジたちに連絡。

「全員外の車に気をつける！」

「え？・・・っ！全員伏せなさい！」

「ちっ、全員伏せろお！」

「伏せろ！右からくるぞっ！」

その瞬間UZIが発砲。

バラバラバラバラバラ！

バリバリバリバリバリン！

「総員被害報告！」

「アリア、無事よ。こっちは負傷者は見当たらないわ」

「亮、無事だよ。こっちも負傷者は見当たらない」

「キンジ、こっちはやべえぞ。運転手が負傷した。ついでに言わせ
てもらおうと俺は大型の運転経験は無いぞ」

「そんなことよりこのバスを減速させる方がやばいわよ！たぶん今
までの手口を考えるとこのバスに仕掛けてあるのは加速度爆弾。減
速させたら爆発するわ！」

「？大丈夫だ、車輛科の大型運転経験者がいた。そいつに運転を代
わる」

これでひとまず安心か。

「俺はこれからあのイカレタ車を爆撃する。運転手に車から距離を
とらせる」

「了解」

バスがUZI車から距離をとったのを確認し、ミサイルで爆破する。

徹鋼弾は狙いが甘くなるから使わなかった。

周辺の被害は警察に任せればいいだろう。

「状況を報告してくれ」

「アリアよ、さっきの銃撃で窓が全て割られたわ。後部座席の方は負傷者はいない」

「亮だよ、バスの中心付近にいる。負傷者はいないみたいだ。ただ、さっきの銃撃で後部ドアが破損してもう動かないと思う」

「キンジだ。さっき言ったとおり運転手が負傷。運転を車輛科に代わってもらっている。そして誰かに取り替えられたらしい携帯が前のチャリジャック同様ボーカロイドで指示を出している。」

「やはり『武偵殺し』か」

「その可能性が高いな」

「よし、引き続き爆弾の搜索を続ける」

「了解」

それから五分後、アリアから爆弾発見の報告が入った。

「爆弾を見つけたわ！バスのしたにC-4が3500立方センチはある！」

「……電車は吹っ飛ぶほどの量だな」

その瞬間いきなり横の道からさっきのUZルノー・スパイダーI車が飛び出してきてバスに体当たりをかました。

俺はすぐにそれを機関銃で蜂の巣にし、吠える。

「おい！無事か！？応答しろ！」

「亮だよ、少し揺れてガラスで指を切ったけど無事だよ」

「ふえ？だ、大丈夫です！」

「あ？誰だ？」

「あ、遠山先輩からヘルメットを受け取りました、武藤静香、車輛科です！」

「静香ア！？テメエ何してやがる！」

「お兄ちゃん？お兄ちゃんこそなにやってんの！？後ろのハインドつてお兄ちゃんなの！？」

「ええい、後で説明する！それよりキンジはどうした！」

「遠山先輩ならバス上部にある電波装置破壊に行きましたよ？」

「ヘルメットなしですか！？あのバカ！」

と置いていたらバス上部のハッチが開き、キンジがひよこつと顔を出し、銃を構え、黒い車のワンセグアンテナみたいなものを撃ち落

としてまた戻って行った。

その姿に怪我が無かったから安堵しつつ、今度はアリアを探す。

「亮、アリアはどうしてる？」

「バスの下を見に行っただけ見えていないね」

「確認してくれ」

「わかった」

そしてしばらくして亮から通信が入った。

「アリアちゃんは無事。さっきの衝撃でヘルメットが割れたらしい。爆弾は走行したままだと解体は難しいって」

「そうか、わかった。こっちでどうにかしてみる」

「了解」

そして後ろで控えているレキに質問する。

「レキ、お前あのスピードで走っているバスの下にある爆弾を撃ち落とせると思うか？」

「真横から狙撃出来るのであれば可能だと思います」

「真横から、か」

俺は無線をまた開き、

「静香、レインボーブリッジに向かってくれないか？」

「別にいいけど、わたし、この前駐禁喰らって免停寸前なの」

「安心しろ、そのバスは通行帯違反だ。もう免停は決定だな」

「死ね！クソ兄貴い！降りて来い、轢いてやる！」

と言いつつもレインボーブリッジに向かう辺りさすがだ。

そしてレインボーブリッジに突入した。

俺はバスの真横に来るように高度を調節した。

それから始まったのは狙撃の申し子、レキの狙撃劇。

「わたしは一発の銃弾

銃弾は人の心を持たない。

故に、何も考えない

ただ、目的に向かって飛ぶだけ」

パン！パン！パン！パン！パン！

三発で爆弾を切り離し、四発めで湾に落とす。

それを戸惑いなしに続けざま行うのは脱帽物だった。

爆弾の除去を持って事件は解決。

後始末を警察に引き継がせ、俺らは帰宅。

さすがにあの後に授業に出る気はしなかった。

唯、一つ困った事があったとすれば、それは部屋に殴りこんできた妹であろう。

まさかこの年にもなって3時間説教（年下から）を喰らうとは思って無かった。

亮も苦笑いしていたし。

ちなみに通行帯違反は無かったらしい。緊急事態だったから仕方ないとか。

お詫びとして今度買い物に付き合うことになった。

金を卸してこないと。

美咲も参加するらしいし。

はあ。

十三話 バスジャック（後書き）

アリア傷フラグ叩き折りました。

次はかなえさん編だな。

たぶん。

きつと。

おそろく。

十四話 事後報告（前書き）

今回は短く、本編に関係ありません。

流して読んでも支障にはならないので読みたい人のみでどうぞ。

少し忙しくなつて更新速度が遅くなります。

すみません。

十四話 事後報告

今、俺らはキンジの部屋で事後報告兼反省会デブリーフィングをしている。

「まず、反省会の前に今回の事件の調査結果を報告しよう」

「わかった。じゃあ、出勤要請を出したアリアちゃんから、事件に気付いた理由を教えてもらおうか」

「いいわ、あたしが『武偵殺し』に気付いたのはやつが発する特殊な電波を拾ったから。やつは遠隔操作をするときに特殊な電波を使う。あたしはそれを拾っただけ」

「そんなものがあるなら警察はもっと早く動けたんじゃないか？もしあっちが気付いてなかったら通報すれば増援を期待できたかも知れないのに」

「警察は動いてたわよ。周辺の一般人の避難にね。だからあたし達がバスに一番乗りだったわけ」

「なるほど、それじゃあ次は剛気君。あの事件の被害状況は？」

「そうだな、あのバスで言うところ窓ガラスが前後除いて全て木っ端微塵になり、車体の右面は銃弾でボロボロ。拳銃の果てには駆動系が爆弾に接着された所為か最後の狙撃解体でお釈迦だ。あのバスはスクラップ確定だな。人的被害で言うならバスの運転手の右肩が貫通銃創だった。後はかすり傷程度だ。ほぼ武偵しか乗っていなかったのが救いだっただな」

「次は、美咲ちゃん事件の調査結果頼むよ」

「わかりました。え〜と、まずはあのルノースパイダーですね。ア
レは盗難車で、盗まれたのも国内ではありますが、青森と京都と離
れた場所から盗まれていて犯人の場所の確定には役立ちませんでし
た」

「当たり前よ、そんな簡単に尻尾を掴ませるようなやつだったらも
うとつくのとうに捕まっているわ」

「それもそうなんですが一応報告です。銃座に使われたUZIは都
内の警察押収品倉庫から盗まれた模様。識別番号も一致しました」

「都内？じゃあ、それは都内に入ってから用意されたものだったの
か。ならば本当は車には別の使い道があったのか。先に車を用意し
て銃座を後なんて変だと思わないか？」

「もしくは犯人は都内にいるか、でしょ」

「そうだな。美咲、後でもう一回調べなおしてくれ。証拠になりそ
うなものは全て引っ張り出せ」

「わかった」

「さて、次は反省点だな。」

「まず最初にアリアちゃんから行くこうか」

「あたし？ん〜、強いて言うなら剛気のへりに爆弾解体用の機材を

載せてくればよかった事ぐらいかな」

「いちいち積んではいられないが、わかった。引っ張り出しやすいところにおいておくことにしよう」

「アリアちゃん他には？」

「今回キンジと剛気の妹のお陰で減速しなくてすんだわ。そこは褒めてあげる」

「そう思うなら今度の買い物半額出してくれ。財布が枯れそうだ」

「以上よ」

ガン無視ですか、そうですか。

「次ぎ、レキちゃん」

「私は剛気さんに質問があります。レーダーを積んでいれば二台目の車の衝突は未然に防げたのでは？」

「ああ、あのへり、レーダーは積んであったが下に車が多すぎて突っ込んでくる車の判別が出来なかったのさ」

「そうですか、私からは以上です」

「美咲ちゃん、どつぞ」

「私は今回全体的に情報の通達がおろそかだったと思います」

「それもそうだね。僕も美咲ちゃんと同意見だ」

「それもそうだ。俺自身が定期情報報告を忘れていたんだからな。こんな真似は二度としないと誓ってやるっ」

「そうだ、今回は準備不足であせっていた。」

戦闘、および作戦に必要な情報の通達を怠ったのは痛い。

最悪のケースであればバスが木っ端微塵になっていた可能性があった。

反省。

「さて、次の議題と行こう。今回がアリアを入れて解決した事件の一番目なんだが、お前らはどうだった？」

「朝、蹴り起こされた事に目を瞑るのなら特に問題なし」

「僕としてはもう少し装備を整えたかったな。UZIにC装備だったからいいけど弾倉が2つだけってのはきついと思う。別に僕は発砲して無いからいいけど」

「俺は大体亮と同じだな。あんなバスチェイスするんだったらもう少し機動性あげてくれればよかった」

「私は別に言う事はないよ？」

反対意見は無いに等しいと。

「ならば契約は続行だな。必要なら呼べ。できる限りの協力はしてやる」

「……………ありがとう」

さて、事件の解決、事後報告も終わったし。

「飯食いに行くか」

「」「賛成」「」

「へ？作るんじゃないの？」

「無理、疲れた。こんな疲れてるのに料理は正直面倒くさい」

「……………剛気、いい機会だから言っておくわ。『ムリ』、『疲れた』、『面倒くさい』。この3つは、人間のもつ無限の可能性を自ら押し留めるよく無い言葉。気を付けなさい、あなたには人は到底到達不可能な才能を持つてる。それを自分から縛るなんて馬鹿げてる」

「……………わかった。気を付けよう」

そうして俺らは恒例の焼肉屋に来ている。(とはいっても恒例と言うほど来ていないが)

「あ、キンジ！それはあたしの塩タンよ！」

「フン、焼肉つてのは戦場なんだよお！て、亮！俺のホルモン食いやがったな！」

「いやあ、みんなボーっとしてるものだから取らせてもらっただよ」

「そう言う亮くんの中落ちいただき！」

「美咲ちゃん!？」

「そう来るなら、剛気!あんたのカルビもらうわよ!」

ぱっ、ビシィッ!

「な、邪魔すんじゃないわよ!」

「言っただろっ、戦場だと。油断していると肉全部とられるぞ」

「と言うわけで、いただきます」

「な、裏切ったわね!美咲い!」

七輪の上で箸が大暴れしたり。

「剛くん、あ〜ん」

「あ〜ん」

ふざけたテンプレやったりと忙しかった。

むしろ料理やった方が疲れなかったんじゃないかね?と思わせるほどだ。

帰りは前回とほぼ同じく、ただキンジが起きててアリアをおぶって

帰っただけだが。

と言うか本人が普通におぶってたから何も言わなかったけどあいつ泊めている事には何も文句は無いのか？（ただキンジがアリアと剛気相手にこの事で文句言っても何もならないとあきらめているからです）

帰った後、俺はシャワーを浴び、ベッドに崩れ落ち、死んだ様に眠った。

明日は何か面白いこと無いかなと思いつながら。

十四話 事後報告（後書き）

次回はハイジャック編に行きたいと思います。
でもその前に少しやりたいネタがあったので閑話が入ると思
います
が。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4471s/>

人類最終で、危険察知で、命を大事に、な運転手

2011年6月12日08時33分発行